

レイオニクスに転生し、ゴジラとともにメビウスの世界で戦うけど何か？

疾風海軍陸戦隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特撮好きの少年、結城和人とは車に轢かれそうな少女を助けて命を落とす。するとそこに神様と名乗る少女に出会いレイオニクスとして転生することになる。転生しようとした和人だったが神様が「ある子も一緒に連れてってほしい」といわれる。そのあることはかつて世界を滅ぼしかけ世界から恐れられた破壊の神であり怪獣の王であるゴジラであった。和人は怪獣王ゴジラとともにウルトラマンメビウスの世界へと転生するのであった。

目次

登場人物紹介	1
プロローグ	5
第1話	12
第2話	19
第3話	26
第4話	34
第5話	40
第6話	46
第7話	54
第8話	60
第9話	68
第10話	73
第11話	78

登場人物紹介

人物紹介

結城和人

誕生日：7月7日

身長：170センチ

出身：東京都浅草

年齢17歳

趣味：怪獣映画を見ること、得意なことは柔道

好きな怪獣：エレキング・バキシム・ゴジラ

持ち物：ネオバトルナイザー

好きなもの：エレキングのシチュー

黒髪、黒目の特徴な怪獣映画やウルトラマンの番組な大好きな高校生。ある時特撮祭りの帰りに車に轢かれそうな少女を助けるため、命を落とす。しかし神様と名乗る少女の力によってウルトラマンメビウスの世界に転生される。また転生の特典として『大怪獣バトル』に出てくるネオバトルナイザーをもらうほかパートナー怪獣として宇宙怪獣エレキングと一角超獣バキシム、そしてあの世の地下牢に幽閉されていた怪獣王ゴジラとともに転生する。

性格は心優しく義理堅い。また弱い者いじめや怪獣や宇宙人差別を嫌う。パートナーである三体の怪獣のことは道具ではなく友人や相棒として接している。そのため三人（正確には三匹だが）には信頼されている。転生後は三人とともに怪獣騒動が起きるまで静かにアパート暮らしをしていた。

ゴジラ

人間としての名：芹沢龍子

身長：173センチ

誕生日：11月3日

出身：海底

年齢：19歳（転生し人間の姿の時）

趣味：裁縫と自然鑑賞

好きなもの：エレキングのシチューとカレー

嫌いなもの：人間（特に自分勝手に傲慢な人間が大嫌い）

必殺技：放射熱線

1954年に登場した初代ゴジラ本人。水爆の影響で故郷や家族を失いそれ以降人間たちへの復讐を決意し、日本本土を襲い東京を火の海にした。しかし芹沢博士のオキシジェン・デストロイヤーによって骨ごと溶け死んだ。死んだあとあの世に行ったのだが、あの世でも大暴れしたため神の力によって地下牢へ幽閉されていた。だがしかし幽閉され数十年後、神に連れられた和人に出会い神に『牢から出す代わりに和人のパートナーになれ』と言われ、しぶしぶ半信半疑ながら和人のパートナーとなる。人間体の時は芹沢竜子と名乗って生活している。人間体の姿は長身でモデルみたいな体系と黒い長髪が特徴の女性の姿となっている。口調は大雑把な面があり、普段は自分のことを『俺』というがたまに『私』という時がある。好戦的な怪獣体とは違い人間体の時は結構面倒見がよく、お金のやりくりなどはほぼ彼女がやっているなど姉御肌な面があり、パートナーである和人にも何かと気にかけている。

ゴジラとしての姿は『ゴジラ?メカゴジラ』『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』に出てくるゴジラ。

人間としての姿は艦隊これくしょんの長門がモデル。

エレキング

人間としての名：友里襟華

身長：162センチ

年齢：17歳

誕生日：10月15日

出身：ピット屋

趣味：料理と買い物

好きなもの：和人とバキシムとゴジラ

必殺技：電気技

ウルトラセブンに倒された初代エレキング本人で和人のパートナーの一人。性格は穏やかで無駄な争いは好まない。しかし仲間や友達を助けるためなら戦う時がある。料理が得意で和人たちの暮らすアパートでは調理担当となっている。特にシチューなどの煮込み料理が得意でその味は三人から大好評である。和人のことは『マスター』と呼んで慕っており、たまに大胆にアピールしたりする。

電気攻撃が得意で人間体の時でもスタンガンレベルの電撃を出すことができる。またある時はその電撃をマツサージに使うこともある。また彼女の電撃はその気になれば惑星の1つや2つ容易く消し炭にできるほどの威力らしいが、本人が護身のためだけにその力を使っているのでその心配はない。容姿はボブカットの茶髪姿の少女で艦隊これくしょんの陸奥がモデル。

バキシム

人間としての名：北星子

身長：158センチ

年齢：16歳

誕生日：？

出身：異次元

趣味：サッカーと読書

好きなもの：エレキングのシチューと北斗印のパン

嫌いなもの：芋虫

必殺技：ミサイル攻撃とビーム攻撃と頭の角型ミサイル攻撃

ウルトラマンエースと戦った初代バキシム本人であり、かつてはヤプール人の部下だったが現在は和人のパートナーの一人。明るく活発でボーイッシュな性格で、部屋に入る際にドアの窓ガラスを割って侵入する悪癖がある。その悪癖でゴジラに怒られることもしばしば。和人のことは『和人さま』と呼び慕っている。人間体の時はオレンジがかかった金髪のショートヘアで、首に黄色いスカーフを巻いている

のが特徴の少女の姿をしている。料理は下手でゴジラに『あいつに悪気はないのはわかってるんだが、あいつが作ったものはどう見ても産業廃棄物にしか見えない』といわれるほど。たまにエレキングに料理の作り方を教わっている。なんでも『意中の人に喜んでもらいたいから』らしく、意外に乙女チックな面もある。かつてはヤプール人の配下だったが、彼女曰く『それは過去のことであり今は今』とのこと、現在ではヤプールへの忠誠心は失われている模様。

容姿モデルはウルトラ怪獣擬人化計画 feat. POP Com
i c c o d e のバキシム

プロローグ

「あく。やっぱりウルトラマンとかの特撮はいいな〜」

俺の名は結城和人。ごく普通にいる少年だ。まあ、ちよつと特撮好きだがな。で、今俺は池袋でウルトラマンやゴジラの特撮祭りに行っていた。その展示品にはウルトラマンやゴジラのスーツに初代ガメラの台本などいろんなものが飾ってありまさに特撮好きにとっては夢のような場所であった。中でも俺の目に留まったのは「大怪獣バトル」で使われた本物のバトルナイザーがあった。俺はそれを見た時目を輝かせた小さい時、テレビで見た時最初に見たのは「ウルトラマンメビウス」だったが、一番好きだったのは「大怪獣バトル」であった。主人公が怪獣を操り次々と怪獣と戦い。そしてその中仲間と出会い友情が芽生えるところなんかが一番憧れた。そしてバトルナイザーが発売されたときは苦勞をして貯金をして買ったけ……そして俺は特撮祭りで沢山のグッズを手にかへと帰っていた。

「いや〜財布は軽くなっちゃったけど、まあ目当てのグッズが大量に買えたからそれでいいか♪」

俺はご機嫌でそう言いながら歩く。公園を通り過ぎようとした時だ。

「ん?」

ふいに道路の先でかなりの騒音とともに一台の車が猛スピードで走ってくるのが見えた。

「あぶねえな……あんなに速度を出して……事故るぞ」

俺がそう思っていると、公園で遊んでいた一人の少女がブランコから降りて公園を飛び出る。

すると、さっきの車が急に方向転換してその少女の方へと向かってくる。

「ええい!!」

このままだと危ないと思った俺は、少し強引だったが少女を突き飛ばす。すると目の前にはさっきの車が……ああ、これ俺死んだな……そう思いながら目をつぶり、自分の死を覚悟した。その後、ものすご

い衝撃音と人の悲鳴や救急車のサイレンが鳴り響くのだった。

「・・・あれ？」

目をつぶって死を覚悟した俺だが、なんにも起きず目を開けるとそこには白い空間があった。なんだろうここは俺は夢でも見ているのかな・・・俺がそう思うと

「これは夢ではないよ和人君」

「っ!？」

いきなり後ろから声が聞こえ、振り向くと

「ようこそ結城和人君。私は君が来るのを待っていたのだ」

と、どこぞのメトロン星人みたいなセリフを言う。少し幼い少女がいた

「あ・・・あの・・・」

「歓迎するぞ。何ならアンヌ隊員も呼んだらどうだい？」

「いやいや、アンヌって・・・あんな誰だよ」

俺がそう言うのと少女がニコツと笑い

「まあ、立ち話もなんだし、座って話さない？茶菓子も出すよ」

そう言うのと少女はポンポンっと手を叩くと周りの風景が変わり和室になった。その風景はウルトラセブンに出てくる「狙われた街」に出てくるあの和室だ。しかも外も夕方になってるし

「はい。お茶」

「あ、どうも」

俺は少女からお茶を受け取るとそれを飲む。うん。普通においしいな。すると少女はお茶を飲んで

「さて、自己紹介が遅れたわね。私はあなたたち人間の創造主。つまり神よ」

「・・・はっ？」

「いや、じゃから、わらわは神様じゃ」

いや、神の意味は分かる。ただ俺が知っている神といえば仙人みた

いな老人か、某少女に転生したあの存在xぐらいだ。

「行つとくが私は老人でもなければあの堅物とも違うぞ」

「人の心を読むの止めてくれないか？」

「私も好きで読んでいるんじゃないよ。聞こえちやうだけ。全く神の力つてすごいけど不便なところが多いのよね」

と、ため息をついてそう言う。神の力つて色々大変なんだな。

「・・・で、その神様が一体何の用？てか俺は車にひかれて死んだはずだぞ」

確かに俺は車に轢かれたはずだ。なのになんで・・・

「ふむ。確かに君は死んだ。だが、君のなしたことは良いことだ。一人の少女の命を助けたのは評価に値する。そこで君には特別に行きたい場所へ転生させることにした」

え？転生？転生つてあの転生か？

「あの・・・転生つて、あの生まれ変わる転生のことか？」

「ふむ。そうよ。普通の転生ならリストとかで決められているのだが今回は特別に好きな場所へ転生させようと思つてな。そのほかにも特典を付けてあげよう」

「本当か？」

「本当だ神は嘘は言わない」

そう言うのと神様は紙とペンを出して俺に渡す

「じゃあ、ここに行きたい場所と欲しい特典を書きなさい」

そう言われ俺は。紙に書き込み神様に渡した。神様はその書類を見るその内容は『転生場所、怪獣やウルトラマンがいる世界。特典。バトルナイザー』と書かれていた

「ほほう・・・君は本当に特撮好きなんだね〜いいよ。じゃあ、そこに転生させてあげる。それとバトルナイザーは特別サービスに怪獣もつけるよ」

と、そう言い神様はポンポンと手を叩くと俺の目の前にネオバトルナイザーが現れたそのバトルナイザーは例が持っていた青いバトルナイザーではなく赤いバトルナイザーであった。そして中を覗くとそこには宇宙怪獣エレキング、一角超獣バキシムがいた。

「スゲ〜エレキングにバキシムかく俺の好きな怪獣、超獣じゃないかよ」

「喜んでもらえたかな？あ、そうそう一応このバトルナイザーは他のと違って特殊だな。怪獣を擬人化して出すこともできるよ」

「まじか!？」

「ああ、怪獣とのコミュニケーションも大切であろう？」

「最早何でもありだな……ん、あれ？そう言えばバトルナイザーって三体の怪獣が入るよな？」

「なあ、神様。今気づいたんだけどさ、このバトルナイザー怪獣が二対しかないけどもう一体は？」

俺がそう言うのと神様は少し顔色を変えて

「そのことなんだけどね……君を転生させる代わりに連れてつてもらいたい子がいるのよ」

「連れてつてもらいたい子？誰だ？」

俺がそう言うのと神様は立ち上がった

「……ついて来てくれ」

そう言い俺は神様の後についていく。そして神様はどんどん階段みたいなところへと降りていく。そしてついた場所はどこか牢獄みたいなところであった。そして神様が立ち止まり。顔をあげるそれは大き治りだった。するとオリの向こうから

『……何だ……また貴様か。何の用だ?』

と、その檻の中で唸り声のような声がし、鎖が引きずられるような音とともにその声の主が現れた。その姿は恐竜のような感じで背中には青白い背ビレが特徴でその目は殺意に満ちていた。俺はその姿に見覚えがあった。それは破壊の神と恐れられそして怪獣の中で頂点の存在と言われた怪獣の王ゴジラだった。すると神様が

「やあ、やあ、ゴジラちゃん。元氣そうだね〜相変わらず鎖に繋がれて退屈そうだね〜」

『何の用だと聞いている小娘。それといい加減にこの鎖を外せ!!』

「外したらどうするの?」

『決まっている。俺をここに閉じ込めた神どもをぶちのめす!』

「本当に君は愛想がないね。せつかくここから出そうと思ったんだけどね。」

『なに?』

神様がそう言うときゴジラの眉間がぴくつと動く。するとゴジラは俺の方を見る。

『おい、小娘。そこにいる人間は何者だ?なんとも間抜けそうな面だな』

と、鼻で笑うとすると神様が

「実はね。この子は近々、転生することになってるんだよ」

『ふっ……何だただの亡者か。で、そいつの転生と俺に何が関係ある?』

と、ゴジラが睨むと神様が

「うん。ゴジラちゃん。『大怪獣バトル』って知っている?」

『馬鹿にするな。そんなもん牢獄の中でも知っている。それがどうかした?』

「うん。知っているなら話が早いね。実はねゴジラちゃんはこの結城和人君のパートナー怪獣になってほしいんだ。」

と、そう言いた瞬間ゴジラがギラリと俺を睨み

『俺がこんな人間の配下になれと?ふざけたことを言うとき噛み殺すぞ。ロリ神が。大体俺は人間が大っ嫌いだ!常にに自分の都合のいいことしか考えず、核や汚染物質で他のいきものを苦しめる罪深き野郎の言いなりになるなんてまっぴらごめんだ!』

と、ゴジラがそう俺を睨みそう言う。確かにゴジラの言いたいこともわかる。ゴジラはもともと海底で静かに暮らしていた恐竜、ゴジラザウルスの末裔。しかしビキニ環礁の水爆実験で放射能を浴びて怪獣化した。いふなれば人間の勝手な都合やエゴで住処を壊されさらに体を作り替えられた。ゴジラが人間を嫌いになるのも頷ける。すると神様が

「もちろんゴジラちゃんの言いたいこともわかるよ。でもね、このまま人間を憎み続ける姿、もう私は見たくないんだよ。君には人間と触れ合ってもらいたいんだよ。君だってもともとそんな性格じゃない

「かったでしよ？」

『・・・・・・・・』

神様にそう言われゴジラは黙る。すると俺は前に出て

「なあ、ゴジラ。人間だってお前の言う悪い奴らばかりじゃないんだぜ。いい奴らだっている。だからもう一度人間を信じてみるつもりはないか？」

『・・・・・・・・』

「もし、俺と一緒にいて俺のことが信用できないのであれば、それは俺の力不足だ。だから俺と共にいて生活をして人間を信用できないのであるならその時は俺を殺してもかまわないよ」

俺がゴジラの殺気を耐えつつ勇気を振り絞ってそう言いゴジラは俺の目をじつと見る。すると

『ほうく威勢がいいな人間の小僧・・・・・・・・』

そう言いゴジラはニヤリと笑う。するとゴジラは

『・・・・・・・・小僧。名は？』

「結城和人」

『結城和人か・・・・・・・・いいぜ。お前の言葉信じてやる』

「え？それじゃあ」

『ああ、いい加減こんなじめじめした牢獄にいるのもうんざりしていたんだ。てめえとともに一緒に行ってやるよ。だが、今の言葉を違え得たら、容赦なく殺す。いいな？』

「ああ、いいぜ。ゴジラ」

俺がそう言うと神様が

「話は決まったようじゃな。では転生させるぞ。じゃあ、ゴジラ。前はバトルナイザーに入ってくれ」

神様が言うゴジラは目をつぶりそしてゴジラはバトルナイザーに吸い込まれた。

「では転生させるぞ」

「ああ、ありがとな神様」

そう言い、俺は光に包まれて神様の前から姿を消すのであった。

「さてさて二人とも言ってしまったわね・・・・・・・・まあ、あの二人ならやつ

ていけるわね。頑張んなさい和人、ゴジラ」

と、面白い神様は一枚の書類を見てそう言うのであった。その書類には

『結城和人。転生先『ウルトラマンメビウス』、特典希望：バトルナイザー、パートナー怪獣、ゴジラ、エレキング、バキシム』

と書かれていたのであった。

第1話

俺がゴジラたちとともに転生されて早一か月、今のところ怪獣騒ぎとかがなく何も無い。一応転生した後、神様から俺がどこへ転生したか教えてもらった。転生場所は「ウルトラマンメビウス」の世界だ。そして今俺がいる場所は防衛チームである『GUY'S』の近くにある古いアパートだ。まあ、メトロン星人が潜伏していたアパートをイメージしてくれば助かる。さて話を戻そう。先ほど言った通り怪獣事件が起きない。もしかしてメビウスが来る前なのか、はたまたアーマードダークネス編が終わった後なのかよくわからない状況だ。

「はあく退屈だ〜」

俺は部屋でゴロゴロする。すると

ドガツ!

「へぶっ!?!」

「おい、そんなに退屈なら部屋から出て散歩したらどうなんだ和人?」いきなり俺の頭を踏んづけ誰かがそう言う俺はその声を聞いて俺は振り向くとそこには黒いスーツを着た女性がいた。

「ああ・・・ゴジラか」

「ああ・・・じゃねえよ。全くてめえというやつはそれでも(一応)俺の相棒か?そんなだらけきった生活していると体に良くねえぞ」

そう実はこの女性、ゴジラなのだ。すると台所から

「はいはい。ゴジちゃんも、マスターもじゃれてないでご飯ができたから食器並べるの手伝ってよ」

と、そこに鍋を持った白のワンピースに牛柄のフリフリエプロンを着た17歳ぐらいの少女が言う。

「ああ、ごめんごめんエレキング。今日のメニューは?」

「うふふ!今日は私の特性シチューよ!!マスター!」

「おっ!シチューだと!?やったなゴジラ。今日はシチューだぞ!」

「・・・まあ、エレキングのシチューは上手いからな・・・それと和人。はしゃいでいないで手伝え!」

「おつとごめんごめん・・・て、あれ?そう言えばバキシムは?」

「ああ、バキちゃんなら付け合わせのパンを買いに行っているよ。そろそろ帰ると思うけど……」

と、エレキングがそう言った時玄関のドアからこちらに走ってくる足音が聞こえ、そして

バリーーン!!

「ただいま帰りました！和人さま！」

と、ドアについてある窓ガラスを割ってボーイツシユなオレンジ色の髪と青い服を着た少女が飛び入って来た。

「ああ、バキシム。おかえり」

「バキちゃんいいの買えた？」

「うん！北斗印のパンだよ！今日半額セールだったんだ！えっと……確かエースがやってきた日だったけ？まあ、いいや。はいこれ」

「ありがとうねバキちゃん♪」

と、バキシムはそう言いエレキングにパンを渡す。すると

「おい！バキシム！何度言ったらわかるんだ！窓ガラス割って入ってくるのを止めろ！もうこれで18回目だぞ！」

と、ゴジラが割れた窓ガラスを箒で掃きながらそう言う。

「えくでもこの登場しないと落ち着かないよゴジラ。それに何かを割って登場するのはバキシムのお約束だよ？」

「だからといってな！毎回窓ガラスを割られて、それを修理することちに身にもなりなよ！もう修理する代金がないんだぞ！」

「まあ、まあ、ゴジラそんなに怒るなよ。バキシムも悪気があってやったわけじゃないし、で、バキシム。あまりそう言う登場のはやめろよ。ガラスの破片で怪我したら大変だからな」

「うくん……わかったよ」

「はいはい。それじゃあ、シチューを食べようか」

エレキングの言葉にみんなで頷き、俺たちはちやぶ台の周りに座つてご飯にする。そう今俺と話した三人の女性は、俺のバトルナイザーにいるエレキングとバキシム、そして俺とともに転生し俺の相棒となったゴジラだ。なぜ怪獣であるゴジラたちが人間の、しかも女性の姿なのかというと、前に神様が説明した通りこのバトルナイザーは怪

獣を呼び出すこともできるが、それと同時に仲間にした怪獣たちを擬人化させて召喚できるからだ。俺は転生した後、すぐにそれを試す以案の定、三人とも人間の姿になって現れた。そしてみんなは最初は人間生活に戸惑っていたが、今では普通に馴染んでいる。人間嫌いのゴジラは「なんで俺が人間の姿で生活しなきゃならないんだ？」と不機嫌そうだったが俺が「人間の生活とかそう言うのを自分の目で見てみたら何か見えるかもよ」というと、彼女は半信半疑ではあるが今日まで人間として生活をしてきている。まあ、みんなもそうだが俺たちだけになると尻尾とかが出たりするんだけどね。ともかく、そんなゴジラも少しは心を開いているのか、近所の子供が挨拶するのにつこりと笑って挨拶するのを見たことがある。因みに人間時の時人前ではゴジラの名前は『龍子』で、エレキングは『襟華』だ。バキシムは最初『夕子』って名乗ろうとしたが、エレキングに「それは……ちよつとやめようね」と言われて仕方なく『星子』と名乗っている。安直な名前だが、それでも三人が必死に考えた名前だから文句は言わない。むしろ可愛い。

「あ〜いい匂いだ。そうだろ二人とも」

「そうですね！やっぱエレキングの作るシチューは最高だからね！」

「下らん……」

「またまた。ゴジラも実際は食べたくでしようがないんだろう？この前シチューが出た時だって、5杯もお代わりしたじゃないか」

「う、美味かったんだから仕方がないだろう……それよりも和人」

「ん？なに？」

「ここに転生して早、ひと月だが何も起こらん……本当に怪獣が出てきやがるのか？」

「そうですね〜新聞で見ても最後に出た怪獣はひと月半前に出た『グドンとツインテール』だったらしいし、そろそろ出てきてもいいのにね〜何ならうちらが大きくなってひと暴れする？」

「エレキングの言う通りっす。人間生活も楽しいけどいい加減に戦いたいよ〜てか暴れたい！」

「やめろ二人とも。俺は喧嘩は好きだが無意味な喧嘩は好かん。ま

あ、出てきたとしてもウルトラマンとやらと戦えるから別にいいがな……」

「ゴ、ゴジラちゃん……顔が怖いよ?」

「そうだよな。俺自身もそろそろ出てきて欲しいと思うけど……」
と、俺もそう思いながらそう言う。するとエレキングが食事の開始を催促した。

「まあ、文句を言ってもしょうがないよ。ほら、シチュー食べよ」

「そうだな。その話はおいおいやるとして食べるか。じゃあ……」

俺がそう言うのと、みんなが手を合わせて……

『いただきまーす!』

と、そう言いシチューを食べようとした瞬間

ドオオーン!!! グラグラグラ!!

『っ!』

急に大きな音とともに地面が大きく揺れる。

「な、なんだ!？」

「じ、地震!？」

俺とゴジラが驚くとガシャンという音が聞こえる。するとエレキングが大声をあげる

「あゝ!! シ、シチューがさっきの揺れで!？」

「二「なにつ!」二」

その言葉に俺とゴジラそしてバキシムがエレキングの言葉を聞いてシチューの入った鍋を見ると……

「二「ああー!!」二」

さっきの大揺れで鍋はひっくり返りそこからシチューがこぼれもはや食べられないほど無残なことになっていた。

「あ……あああ! エレキングが作ってくれた特性シチューがー!!」

「わ、私……この時の為に朝と昼抜いたのに……」

と、俺とバキシムはがっくり肩を落とし膝をついていた。

「だ、大丈夫。また作り直すから。ゴジラちゃんも何か言っ……て、ゴジラちゃん?」

エレキングは俺を励ますように言いそしてゴジラの方を見るのだ

が

「シチューが・・・シチューが・・・」

「ゴ、ゴジラちゃん？」

と、完全に魂の抜けたような声で無残な姿になったシチューを見てたそがれる。まあ、ゴジラの気持ちはすぐわかる。それほどエレキングの作るシチューは美味しいのだ。一体何なんだよ・・・みんなのシチューを台無しにしたこの揺れは・・・

俺がそう思った瞬間

ギャオオー!!

ギャオーン!!

グワアーオー

と、外でもものすごい叫び声が聞こえるんであった。俺たちは窓を開けて外を見るとそこには二体の怪獣の姿であった。一匹は頭に角をはやした青いからだ特徴の怪獣アーストロンだったがもう一匹はこの世界にいるはずのない生物であった。コウモリの翼に角ばった頭が特徴の怪獣だった

「おいおい・・・あれはアーストロンにテレスドン、それとあれは昭和ギャオスにジラか!？」

「あの野郎どもが、シチューを！超獣である私にこんな仕打ちをするとは許せない!!和人さま！私をモンスロードしてください！食べ物
の恨み、晴らさしてください!!」

「落ち着いてバキちゃん」

と、バキシムが怒りながらそう言いエレキングがなだめる。すると今まで抜け殻状態であったゴジラがゆっくりと立ち上がりそして何やら黒いオーラを身にまといゆっくりと俺たちの方へ来る。そしてゴジラは外にいる怪獣たちの方を見て

「・・・楽しみにしていた食事を邪魔するなど許さん・・・.#」
「ひっ！」

ゴジラが怒気をはして言葉にできない怖い顔でそう言うのと、そばにいたバキシムやエレキングが顔を青くする。まあ確かに怖いよな。すると・・・

「おい、和人……俺をモンスロードさせろ。あいつらをしばき倒しに行く」

と、怖い目でそう言う。ああ、これ断ったら絶対に殺されるな。俺はため息をつき

「わかったよ。言つとくが街は破壊するなよ」

「善処する……」

俺がバトルナイザーを手にそう言うのとゴジラは頷き、光となってバトルナイザーに吸い込まれた。俺はそれを確認した後

「……行け！ゴジラ!!」

俺がバトルナイザーを上に掲げてそう言うのと、バトルナイザーは光だったのであった。

『バトルナイザーモンスロード!!!』

一方、俺たちがアパートにいる頃『GUYS』では「怪獣が出現だ」と

と、隊員であるリュウがそう言うのとモニターが現れる。そこに映像が映し出されると、鉄平がおどろいて

「あ、あれはアーストロンだ！それにもう一体は」

と言う。それに続くように隊員の一人であるコノミが

「ドキュメントSSSPに記録が残っていました。レジストコードは「地底怪獣テレスドン」です！」

と言うと、さらにその二匹の怪獣とは違う怪獣が現れた。

「おい、また別のが出てきたぞ」

と、トリヤマ補佐官が言うと、コノミがパソコンで調べるが……「……この怪獣には記録がありません！」

「となると新たな怪獣か……ミライこの二体の怪獣に見覚えはあるか？」

「いいえ、僕も見ることがありません」

「とにかく出撃だ」

『G・I・G!』

サコミズの言葉に隊員がそう言い出撃しようとするが

「あ、あれ!？」

とコノミが声をあげみんなはまたモニターを見ると4体の怪獣の前に謎の光が現れた

「な、なんだ？何が起きろうとしているの？」

とマリナがそう言うと言うと光が消え現れたのは青白い背ビレをした黒い恐竜のような怪獣だった。

「な、また怪獣か!？」

と、リュウが驚いてそう言うとその黒い怪獣は威嚇するように唸り
そして……

グワオオooooooooon!!!

と、力強く吠えるのであった。その怪獣とは怪獣の頂点に立つ怪獣の王にして、かつて世界を滅ぼしかけた破壊の神と呼ばれる大怪獣ゴジラであった。

第2話

「な、なんだ!? また怪獣が現れたぞ!」

トリヤマ補佐官がいきなり現れたゴジラを見て驚きの声をあげる。

「怪獣が5体も……」

「しかもテレスドンやアーストロン以外は見たこともない怪獣です」

「あの黒い怪獣はどうだ?」

「ドキュメントSSSPに記録に残っているレジストコード『えりまき怪獣ジラース』ではないでしょうか?」

「いえ、確かに少し似ていますがジラースにはエリマキがあったはずです。それに体の色や体形はジラースとは違ってスマートな体系で、むしろ恐竜のような姿です」

コノミとテツペイがそう言うとうと

「じゃあ、新種の怪獣か? ミライ。お前、この怪獣が何だか知っているか?」

リュウがそう言いミライはゴジラを見るが

「……いいえ、僕の知らない怪獣です。ただ……」
「ただ?」

「あの黒い怪獣は敵に回さないほうが良いような感じがします。なぜだかわからないですけど、何となくそう言う気がするんです」

未来が答えると、リュウ以下ガイズの隊員達は再びモニターを見るのであった。

ギヤーンゴーン グワワァン

ゴジラが咆哮すると、さつきまでいがみ合っていた怪獣たちが一斉にゴジラの方を見る。

「ゴジラ! なるべく街に被害が出ないように頼む!!」

和人がそう叫ぶと、ゴジラは和人を見て

『わかつている。わかつている。そう心配するな……だがシチューを台無しにしたつげは払ってもらおう』

と、テレパシーで告げる。アーストロンとテレスドンがゴジラに向けてマグマ弾や火炎弾を発射し、ゴジラの胸に命中する。しかし……
「グルルルル……」
「グギャツ!？」

ゴジラは二体の怪獣の攻撃をまともに受けたにもかかわらず傷一つなく、まるで「何かしたか？」つというような笑みを浮かべる。それを見たテレスドンやアーストロンは驚いた顔をする。

「ギャアオオン!!」

と、ジラがしびれを切らしたのかもしくは「無視するな!次は俺だ!!」と、言いたいのか……ジラはゴジラに飛び掛かるのだが……
『邪魔だ。ニセゴジラ』

と、不機嫌そうにそう言う尻尾でジラを吹き飛ばした。しかも飛ばされた場所は何もない広場であった。ゴジラは和人に言われた通りなるべく街に被害が出ないように戦っているのだ。吹っ飛ばすところもわざと街ではなく広い広場とかを狙っている。そして広場に倒れたジラにゴジラは放射熱線を吐き、それをまともに受けたジラは爆散した。それを見たギャオスは逃げ始めた。恐らく自身の必殺技である超音波メスを使ってもゴジラに勝てないと思っただろう。あと、頭に赤い模様が出ていた。そう言えばギャオスって特に昭和版のギャオスは昼間は太陽による紫外線のせいで細胞が破壊されて死んじゃう体質だったけな。もしかしたらゴジラのことともそうだが、太陽の光に耐えられなかったから逃げたのかもしれない……まあ、両方だろ。しかもギャオスが逃げてる時、背中が焦げ煙出てたし……

まあ、そんなことはさておき、残されたのはテレスドンとアーストロンだ。二体はジラやギャオスがいなくなってもまだゴジラと戦う姿勢を示していた。まず最初にアーストロンがゴジラに向かって突進し、その突進をゴジラは受け止めてとっくみ合いが始まる。二匹とも互いに譲らず、すさまじいとっくみ合いが続いた。さすがは凶暴怪獣、ゴジラに勝らずとも劣らない怪力だ。更にテレスドンがゴジラの背後に周り込み襲い掛かったが、ゴジラがひらりと躲したためテレス

ドンは一アストロンとぶつかり倒れた。すると今度は、テレスドンとアーストロンは関係プレーで攻撃を開始した。

「あー!あいつめ!後ろから攻撃な上に二人がかりとは卑怯な奴らだ!和人様!助太刀しに行った方がいんじゃないですか?」

と、俺と一緒に見ていたバキシムがそう言う

「いや〜さすがはアーストロンにテレスドン。ゴジラと互角に戦っているな。それに比べてやっぱジラって弱いな・・・マグロしか食べない怪獣って弱いのかな?」

「和人様!そんなのんきなことを言っている場合ですか!助太刀を出さなくていいんですか!」

「俺も確かにそう思ったんだが・・・バキシム。今のゴジラ・・・いや竜子の顔を見てみるよ」

「え?」

俺の言葉にバキシムはゴジラの顔を見る。ゴジラは二体の怪獣の攻撃を受けてもなお、余裕の顔を見せていた。それどころかゴジラはバキシムの言葉が聞こえたのかこちらの方をちらつと向き

『邪魔するなよ・・・今やつと骨のある奴と喧嘩してんだから。たとえば仲間でも邪魔したらたたじゃおかねえぞ』

と、そう言っているみたいにぎろつと睨む。その顔を見てバキシムは血の気が引き、顔を青くする。

「これは邪魔しないほうがいいわねバキちゃん、マスター。ゴジちゃん。怒ると怖いから。こういう時は好きなようにさせた方がいいわよ。まあ、街壊す行為をしようもんなら止めますけど」

と、エレキングがシチューを作り直しながらそう言う。

「エレキング・・・お前余裕だな・・・」

「ええ・・・マスターはゴジちゃんのことを信用していないのですか?」

「そんなわけないだろ。でもあいつが無茶して怪我しないのがちよつと心配なだけだ」

「フフ・・・マスターって優しいのですね」

と、エレキングが微笑み俺は少し顔を赤くする。するとバキシムが

「あ、そろそろ決着がつきそうですね？」

「え？」

バキシムの言葉に俺は顔を向けるとゴジラがアーストロンを逆エビ固めで絞めていた。アーストロンが悲鳴を上げる。テレスドンは……何だか知らないけどのびていた。

「おい、バキシム。俺とエレキングが話している間に何があったんだ？」

「ん？ああ、なんかゴジラの奴アーストロンの奴を背負い投げしてさ、その瞬間テレスドンがゴジラに襲い掛かったんだけど、ゴジラが綺麗なアッパーカットで一発KO。で、テレスドンを倒したゴジラが今アーストロンに逆エビ固めを決めているところですよ」

「そ……そうなのか……」

そう苦笑し俺は再びゴジラの方を見るとアーストロンが『ギ、ギブアップ!!』と言いたげに悲鳴に近い鳴き声を上げる。さすがに可哀そうになって来たな……仕方がない

「ゴジラ。もうその辺でいいだろ。それにそろそろ撤収しないとガイズの連中が来るぞ！」

俺がそう言うのとゴジラは俺を見て

『……ちっ。しょうがねえな……』

と、そう言いアーストロンを離す。アーストロンは這いずりながらその場を抜け出し逃げ出したのであった。そしてテレスドンはとうとう、しばらくして目が覚めたのだが、ゴジラの顔を見るや否やすぐに地底の中へ逃げてしまった。俺は周囲に敵の怪獣がないことを確認すると

「戻れ！ゴジラ!!」

そう言いバトルナイザーを掲げる。するとゴジラは光の粒となり、バトルナイザーへと戻って行った。そしてまたもバトルナイザーが光ると、そこから光の粒が出てきて……

「はあ、久しぶりに暴れたね。でももう少し骨のある怪獣とかいなかったのが少し残念だな」

とそこから女性姿になったゴジラが現れ、肩をぐるぐる回しながら

そう言う。

「おう、お疲れゴジラ」

俺は帰って来たゴジラを労った。するとそこへ上空からガイズの戦闘機が、陸からはガイズの車両などが走ってくるのが見えた。

「やれやれ・・・今頃になって登場か・・・ゴジラを戻して正解だったな。あのままだったら今頃攻撃されていた」

「私は別に気にはしないぞ和人。攻撃してきたら攻撃してきたでやり返せばいいんだし」

「でもそれじゃあ、戦争になっちゃうよ？ゴジちゃん。私たちは静かに暮らしているんだからここで面倒ごととは避けたいよねえ。バキちゃん？」

「ん？私はどっちでもいいけど・・・まあ、戦争になって北斗印のパン屋が無くなっちゃたら困るからなく。ゴジラも人間と無意味に戦ってスーパールとか無くなったら困るだろ。もうエレキングのシチュー食べれなくなるし」

エレキングとバキシムの言葉を聞いたゴジラは

「わかった。わかったよ。まあ、私もこれ以上の面倒ごとは嫌だからな。それにシチューが食べられなくなるのも嫌だし」

と、頭を掻きながらそう言う。するとエレキングが鍋を持ってきて「はい。みんな。ゴジちゃんが戦っていた間にシチュー作り直したから食べよ」

「そうだな・・・さっきはあの怪獣たちのせいで台無しになったけど、今度こそ食べようか」

「そうですね」

「うむ。私もさっき大暴れしたから腹ペコだ」

そう告げた。俺たちは皿を並べ直し、エレキングがそこにシチューを入れる。するとみんなの目がキラキラと嬉しそうに輝きだした。

「じゃあ、食べようか」

と、俺がそう言うのと三人は頷き両手を合わせて

「いただきます！！！！」

と、そう言い俺たちはエレキングの作ったシチューの味を堪能し

た。

「うくん！やっぱりエレキングの作りシチューは美味しいな！」

「本当だ。これは美味しい」

「まったくね！この味は今までのどの食べ物よりも、究極においしいわ！」

「うふふ♪まだお代わりがあるからどんどん食べてね」

俺たちの言葉にエレキングは嬉しそうに微笑んだ。するとバキシムは

「そう言えばあの怪獣騒動でゴジラの存在ガイズの連中にバレちゃったけど、こここの場所とかわかってないといんだけどなく」

「その点なら大丈夫だろう。それにゴジラたちが人間の姿になってアパートに住んでいるなんて考えもつかないだろうし」

「確かにそうですねマスター」

「確かにそうだな」

と俺たちは他人事のように笑うのであった。

ガイズ本部

「……で、リュウ。被害はどうだったんだ？」

「ああ、街の被害はほとんどなく、強いて言えば怪獣が倒れた空き地がへこんだくらいだそうだ」

「そうか……あれだけの怪獣が戦っていたのに被害が少なくてよかったです……」

と、リュウの言葉を聞いたサコミズが安心したような顔を見せる。するとコノミが

「それにしてもあの黒い怪獣すごかったですね。たった一匹で三体の怪獣を倒しちゃったんですから」

「確かに。しかも街を破壊しない程度に戦っていたな……」

「でもさ。その怪獣いきなり消えちゃったよな？どこに行ったんだらう？」

と、リュウやジョージがそう言うとテツペイが

「それなんです。がさつきその怪獣光になって消えたじゃないですか。そしてその光が消えた時小さいながら光の粒がとあるところへ行く姿があったんです」

と、テツペイは先ほどの映像を出しゴジラが消える映像を見せた。すると確かにゴジラが消えた瞬間光の粒がどこかに行く姿が映っていた。それを見たトリヤマは

「ほんとうだ……どこに向かっているんだその光は？」

と、そう言うときミライが

「……なんかあそここのアパートの中に入りましたね……」

「もしかしたらあの中にさつきの怪獣を操っている宇宙人とかいるんじゃないんですか？」

と、マル補佐官秘書がそう言う

「テツペイ。その建物の場所はわかるか？」

「は、はい……あそこは……北川町の〇〇丁目の古いアパートです」

「よし、ではそこを調査しよう」

『G・I・G!!』

そう言いガイズ隊員はそのアパートを調べに行くのであった。

第3話

「あのアパートの住人？そうね。あのアパートに住んでいる人に怪しそうな人物はいないわよ？あ、そう言えば半年くらい前かな？若い男一人と若い女の子が三人引越してきたかね？」

「その人達はどんな感じの人たちなんだ？」

「結城さんのことかい？そうね。若い男の人は親切だね。まじめな子だよ。で、三人のうちの一人龍子さんは、見た目は怖そうだけど結構面倒見にいい人でね。時たま夜の見回りとかしてくれたり迷子の子や困っているお年寄りを助けたりしてくれているよ。もう一人の襟華ちゃんは料理が上手くてね。私もたまにおすそ分けをもらったりしているよ。で、最後の星子ちゃんは活発な子でね。よく近所の子供たちの遊び相手してくれているから近所の奥さんたちにも結構評判がいいのよ」

「そうですか・・・」

「あ、あの：その4人が何かあつたのですか？」

「あ、いいえなんでもありません。ではわたしたちはこれで・・・」

怪獣騒動の後、ガイズの隊員たちは謎の黒い怪獣が消える際に出た光がこの街のアパートに消えたのを見て、現在、リュウとミライがそのアパート周辺を調査しているのだが、今のところそれらしき情報はない。二人は公園のベンチに座って少し休憩することにした。

「なかなか、良い情報が入りませんねリュウさん」

「ああ、そうだな。強いて言えばあのアパートに若い男女がいることみたいだが、それだけじゃあな・・・」

「はい。それにその人たちは街の人からかなり慕われているみたいでしたからね」

と、二人はそう言うと、公園の向こうで子供たちがサッカーをして遊んでいるのが見える。

「子供たちがサッカーをしていますね」

「ああ。ジョージの奴が見たら参加しそうだな」

「そうですね・・・ん？」

「どうしたミライ？」

と、ミライがサッカーをして遊んでいる子供を見て何かが見えたのか、不思議そうな顔をする。それを見たリュウが未来に尋ねるとミライが答える。

「いえ、あの遊んでいる子供の中にいる人なんですが・・・」

「人？・・・ああ、一人だけ大きい子がいるな。」

と、二人がよく見てみると

「ほら星子お姉ちゃんパスして!!」

「いいよ！ほいパス!!」

「いいぞく!!このままシュートしちゃえ!!」

確かに子供たちに紛れ少年みたいな短い髪をした15、6くらいの少女が子供たちと一緒にサッカーをしていた。

「年齢からして、俺らと近い歳かな？そう言えばさつき事情を聞いたおばさんに子供の遊び相手をしている少女がいるって聞いたけど、その子かな？それがどうかしたのか？」

「いえ、あの少女。何やら別の気配というか、人間とは違う気配がするんです」

「なに？宇宙人か？」

「わかりませんがこの世界の住人とは違うような・・・そのような感じがするんです」

「ふくん・・・後で聞いてみるか」

と、二人はその少女たちのサッカーを見るのであった。

「あく楽しかった。星子お姉ちゃん。また遊んでね」

「うん。また遊ぼうな。じゃあ、帰り道には気を付けてね」

「」「うんじゃあねく」「」

そう言い子供たちは帰り、星子は笑顔で手を振って子供たちを見送る。

「さてと・・・私も帰ろうかな。あまり遅くなるとゴジラがうるさいし」

そう呟いて帰りはじめる。その時

「ちよつといいか?」

と誰かに声をかけられたので振り向くと、そこにはリュウとミライがいた。それを見た星子ことバキシムは動揺するように目を丸くした。

「(げえ!?!ガイズの隊員。まずいどうしよう……バレちゃったのかな?……いけない。いけない。ここは冷静に……) あ、あの……何ですか?」

と、冷静にそう言うと

「君が北星子さんですか?」

「あ、はい……それが?あの……私に何の用でしょうか?」

「あ、いいえ、あなた古いアパートに住んでますよね?」

「それが何か?」

「いや、この前、怪獣騒動があっただろう?それでさ、そんな時現れた怪獣の一匹が光となって消えたんだ。で、その光があんたが住んでいるアパートに吸い込まれてさ。もしかしたらあんたが住んでいるアパートに怪獣、もしくはそれを操っている宇宙人がいるかもしれないんだ。それで、あんたが住んでいるアパートで、不審なやつとかそういうのはいなかったか?」

「っ!?!」

バキシムはそれを聞いてさらに動揺する

「(やばい……これ完全に怪獣であるうちらがあのアパートにいたことが、ばれかけている……これはすぐに和人さまに言わないとまずい。それよりもまずはこの状況をどうにかしないと……)」
「どうしたんですか?」

「おい、黙ってないで何か言ってくれ」

バキシムが考える中、ミライとリュウが彼女を覗き込みながやそう言うと、バキシムは首を横に振り

「あ、いいえ。なんでもないよ。そうだね、確かに私はあそこに住んでいるけど、これといって怪しい連中は住んでいないぞ?まず第一に不審者がいたら警察に通報しているよ。お宅警察?違うよね?あはは

はく」

「え、ええ……」

となぜか少し焦ったかのように早口に言うバキシムに、二人は苦笑する。するとバキシムは腕時計を見て

「あーそろそろ帰らないと。じゃあね。ガイズの隊員さん」

と、そう言つて公園から逃げるように出ていった。それを見た二人は

「あの少女……怪しいな。あのアパートと怪獣の単語を出した途端。急に動揺したな」

「はい。もしかしたら彼女は何かを知っているかもしれない」

「だな。あのアパートに行つて詳しく調べないとな。まずはあの子を追いかけてよう」

と話して、バキシムの後を追いかけるのであつた。まあ、住んでいる場所がわかつているためその必要はないのだが……二人は星子を追つていき、先ほどの古いアパートの階段を走つて昇る彼女の姿を見た。それを見た二人は互いの顔を見て頷き、階段を上がつていった。しばらく追うと一つの部屋にたどり着いた。するとその部屋から話声が聞こえた。

「……みたいですね」

「ああ、そうだな」

と、ミライの言葉にリュウが頷く。そしてミライはドアを叩き

「もしもし？結城さん？いらっしやいますか僕たちガイズの者なのですが」

と、そう呼びかけるが返事がない。すると今度はリュウが

「おい、いるんだろ？出てきてくださいよ結城さん」

と、呼びかける。するとドアの奥から足音が聞こえて、ドアが開いた。

「ようこそガイズの諸君。我々は君たちが来るのを待っていたのだ」

短い黒髪の少年が現れてそう言った。

時は少し遡り

「す、すまないエレキング……」

「いいのよゴジちゃん」

「大丈夫か龍子？」

部屋の中ではゴジラがうつぶせになり、その肩や腰をエレキングがマッサージをして、和人が料理をしていた。

「不覚だ……まさか筋肉痛になるとは……」

「仕方がないよゴジちゃんは60年前に死んだあと、ずっとあの世で狭い牢獄に監禁されて運動不足だったんだから」

「だとしても情けない。あんな怪獣三匹と戦っただけで、まあ一匹は正直言つて弱すぎたが……それにしてもエレキング。お前のその電気、便利だな。気持ちいいぞ電気マッサージ。おかげでこりがほぐれる……」

「ふふ。後でシツプ張つてあげるね。……それよりもマスター。バキちゃん遅いね」

「そうだな……まだ、公園で子供たちとサッカーしているのかな？」

「そうかもしれないですね。そう言えばマスター。何を作っているんですか？」

「ああ、今夜の夕飯の準備だよ。因みにメニューは生姜焼きとポテトサラダと味噌汁だ」

「そうですか。バキちゃんが訊いたら喜びますね」

と、エレキングはゴジラの腰や肩にシツプを張りながらそう言う。

「そう言えば私が買いものをしていた時、この街周辺でガイズの隊員たちがうろついていたぞ？」

「ガイズの人たちが？もしかして私たちがここにいるのがばれたんでしょうかマスター？」

「いや、それなら直ぐに俺たちいる部屋へ大勢押し寄せているはずだよ。武器をもって。たぶんまだ調査しているんだろう。」

「かもな。これは少しほとぼりが冷めるまで派手な動きはできないな……」

俺とエレキングとゴジラがそう話していると、急に外からドタバタと足音が聞こえ始める。ああ、この足音には聞き覚えがある。

「襟華……」

「はい、マスター」

俺の言葉にエレキングは立ち上がり、ドアを開ける。その代わりにエレキングは青空を描いたポスター大の絵を入り口の前にかざす。すると……

「！和人さま！和人さま!!大変です!!」

そこへポスターを破ってバキシムが滑り込んできた。

「おい。落ち着けよ星子。何かあったのか?」

「はいバキちゃん。お水飲んで落ち着いて」

と、エレキングが水の入ったコップをバキシムに渡すと、バキシムはその水を飲み一呼吸してから告げた。

「うちらがこのアパートに潜伏していることガイズの連中にバレていますよ!!」

「「え?!!」」

その言葉に俺を含めみんな驚く。え?なんでバレたんだ?

「おい、バキシムどういうことだ!?!まさかお前うつかり喋ったとかないんじゃないのか?」

「それはないよ!」

「落ち着いてゴジちゃん。で、バキちゃんそのことを詳しく説明してくれる?」

と、エレキングがそう言いバキシムは頷くとその理由を語る。そして理由を聞いた後、俺たちは頭を抱える。まさかゴジラをバトルナイザーに納めるときの光をガイズのモニターに録画されてたとは……俺としたことが迂闊だった……

「どうしよう……」

「どうするんだ和人。」

「どうするもこうするも……場所がわかっちゃった以上。もうガ

イズの人たちがここに来るのは時間の問題だな．．．ん？どうしたゴジラ？」

「どうしたのゴジちゃん？」

と、俺は腕を組んで悩む。すると、ゴジラの眉がぴくつと動き立ち上がる。少しぎこちなかったけど．．．

「バキシム．．．お前つけられたな」

「え？」

ゴジラ言葉にバキシムが首をかしげると、ドアを叩く音がした。さらに

『もしもし？結城さん？いらつしやいますか僕たちガイズの者なのですが』

と、若い男性の声がする。この声って五十嵐○土さん!?いや、ここではヒビノ・ミライ．．．ウルトラマンメビウスか。それにその隣にもう一つの影がある。

『おい、いるんだろ？出てきてくださいよ結城さん』

今度は活発な男性の声、この声はアイハラ・リュウか!?いきなりものすごい人たちが訪ねてきた!!

「き、来た〜」

「どうしますマスター？」

「追い返すんなら協力するぞ？」

と、バキシムは押し入れに隠れ、エレキングとゴジラが俺に言う。ゴジラにいたってはバット持ってるし．．．

「どうもこうも、来ちゃった以上ここで追い返すわけにはいかないだろ？中に入れて俺たちが無害だということを言うしかない」

「うまく行きますでしょうか？」

「やるしかないよ。エレキング。悪いけどお茶の用意をお願い」

「わかりました。え〜とお茶葉どこに入れたかな？バキシちゃんも隠れてないで、お茶菓子の用意お願い。戸棚に羊羹入れてあるはずだから」

「はい。はい．．．えつと羊羹羊羹．．．」

「ゴジラ．．．」

「わかっている。暴れないよ。ただあんたが危ないと思ったら手を出すかもしれないけどな」

「わかった。その時は頼む。さてと……」

俺はそう言いドアを開けてこう言った

「ようこそガイズの諸君。我々は君たちが来るのを待っていたのだ」

と、俺はメトロン星人のセリフの一つを言うのであった。

第4話

「ようこそガイズの諸君。我々は君たちが来るのを待っていたのだ」
俺がアパートにやって来たミライとリュウにそう言うと、二人は目をぱちくりさせる。そんな中、部屋の奥にいたゴジラこと龍子はいうと……

「誰も待っちゃいねえよ。なんなんだよあのセリフ？」

「ああ、メトロンさんのセリフだ。懐かし〜」

「えつと……羊羹……羊羹……どこだっけ……」

と、ゴジラが少し不機嫌そうにそう呟き、エレキングはお茶を入れ、バキシムにいたってはまだ戸棚にあるはずの羊羹を探していた。

「まあ、立ち話もなんですしあがってください。さ、どうぞ」

「あ、ああ……」

「お邪魔します」

そう言つて俺は二人を部屋へ案内し、席に座らせる。俺を警戒しているのか二人か銃を片手に持っていることに気づいた俺が

「あ、それとなんですけど武器をしまってくださいませんか？人の家でそう言うのを向けるのはマナー違反だし、別に罠にかけるとかそう言うのじゃないので。それに暴発して部屋を壊されたら大家さんに怒られるので」

と、苦笑しながら言つたところ、二人は静かに武器をしまった。

「お茶が入りましたよ♪」

そこへエレキングが二人にお茶を出す。

「あ、どうもありがとうございます」

「……」

お茶を出されミライはお礼を言うが、リュウはそのお茶を怪しむように見るだけだ。

「毒なんて入っていませんよ。ささっ！グーっといっけてくれ。襟華の淹れたお茶は美味いんだぞ」

和人の言葉にリュウとミライは一口飲む。

「あ、ほんとだ美味しい」

「だろ？あれ？襟華。バキ・・・星子は？」

「ああ、星子ちゃんなら、羊羹が見つからないから近くのスーパーに買いに行つてくるって言つて飛び出しちゃいましたよ？」

「あ、そうなの・・・」

俺は戸棚のほうをちらつと見るとすぐそばに羊羹が置いてあつた。恐らくバキシムは慌てていたのですぐ目の前にある羊羹に気付かなかつたのだろう。あいつああ見えておっちょこちよいだから・・・俺は少しため息をつくときミライたちの方へ顔を向けて

「すまない・・・えつと、で、ガイズの隊員であるお二人が俺たちに何の用ですか？」

と、お茶を飲みながらそう言った。すると二人ははつとしたような顔をして、

「そうだったな。おい、お前は宇宙人なのか？」

とリュウが俺に聞いてきた。

「宇宙人？はて？何のことでしょう？」

と俺がのほほんとした顔で言うと、今度はミライが尋ねてきた。

「結城さん。この前、ここいら辺で怪獣が現れたのは知っていますよね？」

「ええ、もちろん。確かその怪獣たちは謎の黒い怪獣に倒されたんですよね？」

と俺がそう話していると部屋の隅で胡坐をかいている龍子がふふんと笑っていた。

「で、その怪獣と私の部屋、いったい何の関係があるのですか？」

「じつはその黒い怪獣が光となって消えた時、その光がお宅の住むアパートに入つて行つたんです」

「ほう・・・それは不思議な話ですね。で、私はその怪獣だと言いたいんですか？」

「いや、もしかしたらこのアパートに宇宙人が潜伏しているのかもしれないと思つてな。で、お前は宇宙人なのか？」

と、リュウが怪しみつつそう言うと

「宇宙人だったらどうなんだ？殺すのか？」

と龍子が鋭い目線を向けながらそう言う。するとミライが

「いいえ、そんなことはしませんし、させません。ただ少し気になったので。もし宇宙人なら何の目的で来たのか、それとなんであの怪獣を操っているのか。そう言うことを聞きたいのです」

と言う。それを聞いた俺は襟華の淹れてくれたお茶を一杯飲み

「あいにくだが俺は宇宙人じゃない。れっきとした地球人だよ。何ならDNA鑑定でもするか？」

と、笑いながら言った。リュウはしばらく俺を見ていたが、やがてふつと笑い

「……いや、お前が宇宙人じゃないって言うなら、何もしないよ。疑って悪かった。それじゃあ、ミライ。俺たちはそろそろ基地に戻らないと」

「そうですね。結城さん。お茶ごちそうさまでした」

と、そう言い二人が立ち上がると襟華が

「あ、ちよつと待ってください」

と二人のもとに行き、そして

「はい。これ私の作った羊羹です。できたらガイズの隊員たちにどうぞ」

「あ、どうもありがとうございます」

と、襟華は戸棚に置いてあった自作の羊羹を未来たちに渡すと未来たちは嬉しそうにお礼を言って部屋から出るのであった。そして二人が帰った後。俺たちは安心したようにため息をつく

「どうやらこの場は何とかしのげたようだな……」

「そうですねマスター何とか誤魔化せましたね。ねえゴジちゃん？」

「そのようだな……だが連中がこれで引いたとは思えんぞ和人？」

「恐らくな……しばらくは派手な行動は避けなといけないな……」

「そうですね。それよりもバキちゃん、遅いな……」

「確かに。あいつどこまで遠くに買い物に行っているんだ？」

と、俺たちがそう言う俺の携帯が鳴る。俺が形態をとると相手は星子だった。そして俺は携帯を取り

「ああ、星子・・・今どこにいるんだ？え？ああ、ガイズの人なら帰ったよ。で、今どこに・・・はあ？電車で銀座に？で、帰りの電車が無くなって帰れなくなった？ああ、わかった迎えに行くからそこ動くなよ」

とそう言い電話を切ると

「すまないけど星子を迎えに行くから。留守番頼める？」

「はい。行ってらっしゃいませマスター♪」

「ちえっ、しょうがないな・・・日が暮れる前に帰って来いよ」

「ああ・・・それとついでに銀座の土産とかも買ってくるよ」

と、そう言い俺は星子を迎えに銀座へと向かうのであった。

ガイズ本部

「この羊羹、美味しいですね」

「本当ね。甘すぎないでちょうどいい味ねこれは」

「あ、僕の方も残してくださいね！」

「こちらこちら！私の分も残してくださいよ!!」

「補佐官。慌てないでください。ちゃんとみんなの分もありますよ」

と、二人が戻った後、ガイズの皆はお土産の羊羹の味を堪能していた

「そうか・・・別に変ったことはなかったか・・・で、リュウ、ミライ。そのアパートの人たちを見てどう思った？」

とサコミズ隊長は未来たちが持ち帰った襟華の羊羹を食べながらそう訊くと

「はい。悪い人ではないと思います」

「俺もだ。それにあいつの目は悪いことを考えているとか嘘をついているような目じゃなかったな」

と、二人がそう言うときサコミズは納得したようにコーヒーを飲む。すると、急にサイレンが鳴り始める

「な、なんだ!？」

「まさか怪獣!?!どこからだ!?!」

と、急なサイレンに驚いているとサコミズは何やら通信で何かの知らせを訊くと

「わかった．．．みんな。銀座でサラマンドラが現れたみたいだ」

「サラマンドラが!?!」

「これよりサラマンドラがいる銀座へ向かう! GUY'S, SALLY

GOO!」

『G. I. G. !!』

CREW GUY'Sの面々が返事をして、発進位置に着き銀座へと向かうのであった

数分前

「いや〜助かりましたよ和人さま」

「本当に驚いたぞ星子。てかお前、菓子ぐらいなら近所のスーパーで買えばよかつたんじゃないか?」

「いや〜でもせつかく初めて来たお客だし、スーパーのお菓子じゃダメかなって思ってた。それに羊羹見つかんかったから」

「羊羹ならすぐそばに置いてあったぞ気が付かなかったのか?」

「全然っす!」

「胸張って言うことJないだろ? まあ、良いか。星子のおかげで銀座の有名店の菓子が買えたし．．．」

と、俺は銀座で星子と一緒に歩いていた。星子を迎えに着た後俺たちは襟華や龍子に土産を買うために有名店のお菓子をかい今、駅に向かって歩いていた。すると

「ね、ねえ、和人さま。一つお願いがあるんですけど?」

「ん?なに?」

「て、手を繋いでいいですか?」

と、顔を赤くしそう言う星子ことバキシム

「ん？いいぞ」

と、そう言い俺は星子の手を繋ぐすると星子は嬉しそうに笑う。すると……

ゴゴゴゴゴゴ……

「なっ!？」

「えっ!？」

急に大きな地揺れが起き俺と星子は驚く。すると向こうの方の建物が崩れそこから再生怪獣サラマンドラが現れる

「なっ!?!あれはサラマンドラ!?!」

第5話

銀座で迷子になっていたバキシムを迎えに来た俺はバキシムこと星子と一緒に駅へと向かっていたのだが、そこへいきなりサラマンドラが現れる。

「あれはサラマンドラ!？」

俺が驚いている中サラマンドラは街を大暴れする。すると星子が俺の袖をつかみ

「和人さま!このままだと銀座が壊滅します!すぐにモンスロードを!!」

と、そう言う俺は

「待て、今はその時じゃない」

「どうしてですか!」

「あれを見ろよ」

と、俺がそう言い上を見ると星子も空を見る。するとそこへガンフェニックス がやってくる。

「あれはGUY'Sの戦闘機……」

「ああ、今モンスロードをすればお前までGUY'Sの攻撃を受けることになる。今は様子を見よう」

「わかりました」

そう言い俺と星子は建物の陰に隠れ様子を見るのであった。

一方、サラマンドラは銀座を暴れまわっていた。するとガンウインガーとガンローダーがやってくる

「いたぞ!攻撃開始!」

「G・I・G!!」

そう言い隊員たちは一斉にサラマンドラに攻撃を仕掛けるがサラマンドラも負けずとばかりに口から『サラマニックファイアー』を放

ち応戦する。

「サラマンドラは確か喉が弱点だ。そこを狙うぞ!!」

と、リュウがそう言うのとガンウィンガーはサラマンドラの喉を狙い両翼から赤い熱線を、カンローダーは機首から黄色い重粒子ビームを放つ。そして交戦はサラマンドラの喉に命中するのだったがサラマンドラは何ともないように平気な顔をする。

「なっ!?!効いていないだど!?!」

「あ、リュウさん!サラマンドラの喉に何かがついています!」

「なに!?!」

そう言い。リュウたちはサラマンドラの喉をよく見るとそこには何かのベルトみたいなのが巻き付けられていた。

「あれはベルトか?」

「誰かが付けたんでしうか?」

「誰かって誰が?」

「とにかく今は奴をこれ以上奴に街を破壊させえな!!」

「G・I・G!!」

そう言いサラマンドラをこれ以上街中へ行かせないために攻撃をするがサラマンドラはどんどん進む。すると、サラマンドラの目の前にあるビルが突然揺れ始めそしてそのビルが崩れ去った瞬間別の巨大生物が現れた。その巨大生物はまるでミツクリザメが怪獣化したみたいな姿であった。

ギヤアアアアアアオオン!!

「な、また怪獣かよ!!」

「あれは……」

一方、GUY S本部でもその生物の映像を見た

「また、怪獣か!?!」

「いいえ、補佐官あれは怪獣ではありません!あれは超獣です!」

「レジストコード『オイル超獣オイルドリッカー』。ドキュメントZ A Tに記録がありました」

「超獣って言うことはヤプールが作った奴なのかね?」

「いいえ、それは不明です。ただこの超獣は結構弱い分類だったはず」

です」

実際にオイルドリッカーは超獣の中でも最弱の分類に当てられ最初に出現した時は東光太郎の操縦する港の極普通な貨物用クレーン車のパワーに封じ込められ撃退され、二度目のコンビナート襲撃の時はZATと交戦中に突如現れた宇宙大怪獣アストロモンスと戦うも、格闘戦ではほぼ一方的にボコボコにされた挙句、反撃しようとするようとしたがアストロモンスの腹部のチグリスフラワーに突っ込んでしまい、そのまま捕食されてしまった過去があった。そしてトリヤマ補佐官やテツペイたちがそんな話をしている中、そのオイルドリッカーの出現は和人たちも見えていた

「あれはオイルドリッカー!？」

「なんであいつがあんなところにいるんだ!？」

「星子、お前オイルドリッカーのこと知っているのか?」

「当たり前ですよ和人さま。私もあいつと同じ超獣なんですから。まあ、あいつは昔ヤプール様の訓練施設である超獣学校であんまりいい評価を出すことができず退学にさせられてその後はブラブラしていたらしいですけど」

「え? やっぱり弱いのか?」

「うーん……まあ、超獣ではなくて怪獣って言う分類での評価ではそこそこで、まあよかったですけどね。ほら、こちら超獣は怪獣兵器でありエリートみたいな感じでしたから常に即戦力が必要だったんですよ。そのせいか他の超獣たちに虐められていましたよ」

「友達とかいなかったのか?」

「いることはいたんですけどそれでの三匹から五匹ぐらいでした。私と友人であるベロクロンもその友人一人でしたよ」

「そうなのか……」

「で、どうするんですか? 和人さま?」

「今のところさつきと同じ、静観していよう。万が一の時にはその時は星子頼む」

「了解」

と、そう言い引き続き俺たちは静観するのであった。そしてオイル

ドリンカーとサラマンドラは互いににらみ合いそして咆哮をあげると両者は激しくぶつかり合う。だがオイルドリンカーはサラマンドラに投げ飛ばされる。投げ飛ばされたオイルドリンカーは口から火炎技である「オイリツシユバーン」を吐き、サラマンドラも口から『サラマニツクファイアー』を放ち両者の火炎はぶつかりそして爆発し激しい衝撃波が起きる。その衝撃波で建物が崩れる。このままでは銀座は廃墟となってしまう。それを見たミライは

「リュウさん。僕行きます！」

「ああ、わかった。頼むぞミライ！」

と、リュウがそう言うのとミライは頷きそして左腕を構えて『メビウスプレス』を現わすと中央のクリスタルサークルを高速回転させ、腕を高く掲げた。

「メビウウウウウウウウッ!!」

叫ぶのと同時に彼の身体を金色の光が包み込み、ミライは本来の姿であるウルトラマンメビウスへと変貌し二匹の前に現れる。すると二体はメビウスの方を見て咆哮をあげメビウスに向かって行く。

『セヤアッ!!』

そしてメビウスは拳を作った左手を上、開いた右手の指先を二体に向けて構え、そして向かって行きサラマンドラは口から『サラマニツクファイアー』を放ちオイルドリンカーはサラマンドラが熱戦を吐いた後、オイルドリンカーはメビウスに向かって突進する。メビウスはサラマンドラの熱戦を躲しそして突進してくるオイルドリンカーの頭目がけて飛び蹴りをお見舞いして転倒させる。そしてメビウスは好機とみてメビウスプレスに手をかざしメビウスシュートを放とうとしたが急にメビウスの背後から謎の光線が当たる

『ぐああ!?!』

いきなりの攻撃にメビウスが倒れる。そして背後から新たな怪物が現れる。

キュアアアアアアアアアアアア

その怪物は本来ゴジラやギャオス、ジラとともにこの世界にいるはずのない怪物であった。それは超古代翼竜メルバであった。

「なんだ!? また怪獣か!？」

「これで3体目・・・いったいどうなっているの?」

と、ガイズの隊員たちが驚く。するとメビウスのカラータイマーが赤く点滅し始める。ウルトラマンは地球上では3分間しか活動できず、カラータイマーの点滅は時間の経過や、エネルギーの消耗を知らせるものなのだ。もしその光を失えばウルトラマンは二度と立ち上がることはできない。ふらつくメビウスにお構いなく三体の怪獣は容赦なく攻撃する。それを見たりユウたちは

「ミラ・・・メビウスを援護するぞ!」

「G・I・G!!」

と、そう言い援護射撃をしようとした瞬間、マリナは

「待つてください!」

と、ストップをかける

「どうしたマリナ」

「あそこを見てください!!」

と、そう言い指を指した場所には

「えーん、えーん!」

道路の脇に逃げ遅れた子供がいて座って泣いていた

「まだ避難民がいます。今攻撃すれば巻き込んでしまいます」

「くそっ! どうすれば・・・」

と、顔をゆがませ悔しそうにそう呟くのであった。

「和人さま! あそこに子供が」

「ああ、助けるぞ星子!!」

「はい。でも今行けばあの三体のせいで近づけません。ですから和人さま。私をモンスロードしてください! ウルトラマンを助けるのは癪ですが子供のためです! なるべく救出の時間を稼ぎますのでお願いします。それに三体のうち一体は我が同胞である超獣。上手くいけば説得して海へ返します!」

「わかった星子。じゃあ、頼むぞ」

「はいー！」

そう言い俺はネオバトルナイザーを出し星子は光りとなってバトルナイザーに吸い込まれ俺はバトルナイザーを空へ向け

「行けーバキシム!!」

そう叫ぶとバトルナイザーは光だし

『バトルナイザーモンスロード!!!』

とその声とともにバトルナイザーから一体の超獣が現れる。それは超獣の中では有名な超獣に分類される『一角超獣バキシム』であった。そしてバキシムは泣き叫ぶ子供を庇うような形で立ちそして

『ギャワアーアーオ!!!』

と、咆哮を上げるのであった。そして和人はバキシムに

「星子！子供は俺が助ける！だからその間に頼むぞ！」

と、そう言うバキシムは頷きそして三体の怪獣に向かうのであった。

第6話

銀座に突如現れたサラマンドラとオイルドリッカー。そしてその二匹を退治しようガイズやメビウスが戦うがそこへ超古代竜メルバが現れメビウスはピンチに陥る。ガイズはメビウスを援護しようとしたがその付近に逃げ遅れた子供がいて攻撃できない状態になった。すると突然その少年の目の前に突如、光が現れ、そしてその少年の前に一角超獣バキシムが現れるのであった

「なっ!? あれはバキシム!?!」

「そんな馬鹿な!? 異次元ゲートは閉じたはずだぞ!?!」

と、ガイズの隊員たちが驚く中、メビウスも新たに登場した怪獣に驚く。だがそんな中、和人は

「バキシム! お前はオイルドリッカーの説得及び俺が子供を助ける時間を稼いでくれ! くれぐれも建物は壊すなよ」

と、そう言うのとバキシムはちらつと和人を見て

『わかったつす! 和人さま!! よっしやあー!! 何十年ぶりに大喧嘩だ!!』

と、そうテレパシーでそう答え、気合を入れるように両手をパンツ!! と、叩きメビウスの方へ向かう。メビウスはこちらへ来るバキシムに構えるがバキシムはメビウスに攻撃せず素通り。代わりにメビウスに攻撃しようとしたサラマンドラに強烈なパンチを喰らわす。そしてサラマンドラはいきなりのパンチに倒れる。それを見たリュウたちは

「なんだあれ!? バキシムがミライじゃなくてサラマンドラを攻撃した!?!」

「仲間割れか?」

「バ、バキシムが、ミライ君を助けた?」

と、リュウたちが驚く中メビウスも唾然していた。するとバキシムはメビウスの方へ向き空にいるメルバに指を指す。まるで『ほうつとしないでサラマンドラは私がやるからお前は空にいるあいつを倒せよ!』といているみたいだ。それを見たメビウスは最初は唾然と

していたがやがて領きメルバへ向かって飛ぶ。一方、和人はバキシムこと星子が子供を助けるためサラマンドラたちを引き離している間、恐怖で身動きが取れなくなっている少年の方へ駆け寄る

「君！大丈夫か!!助けに来たぞ」

と、声をかけると少年は震えながら和人の顔を見て

「……お兄さん誰？ガイズの人？」

「いや、俺はただの一般人だよ。とにかくここは危ない急いで避難しよう！」

「あ、足が震えて動けないよ……」

と、震えてそう言う

「大丈夫俺が負ぶって安全なところまで運んでやるよ」

「でも、あそこに怪獣が……」

「大丈夫だよ。だって……あの怪獣の内、一体は味方だからな」

と、そう言い俺は少年を負ぶって安全な場所へと運ぶのであった。一方、バキシムはオイルドリッカーを見る。オイルドリッカーはじつとバキシムを見ていた。そしてバキシムは声を上げまるで何かを話す。するとオイルドリッカーはまるで喜ぶような声を上げる。そしてバキシムはまた何か話すとオイルドリッカーは大人しくなり領き海のある方へ歩き出すのであった。すると先ほどまで倒れていたサラマンドラが起き上がりバキシムに体当たりしバキシムはその体当たりを受け止め相撲状態となる。一方、空ではメビウスがメルバ相手に激しい空中戦を繰り広げていた。

メルバは素早い動きでメビウスを翻弄し、そして目から必殺技であるメルバニックレイを放つ。だがメビウスはその攻撃を避けるとメビウスはメルバ目掛けて飛び蹴りをし、その蹴りはメルバの腹に命中、メルバはバランスを崩して地上へ落下する。そしてメビウスはその隙を逃さずメルバに向かってメビウムシユートを放ち、メビウムシユートを喰らったメルバは爆散するのであった。

「よしーあとはあの怪獣二匹だけだな」

とリユウがそう言う

「……あ、ちよつとあそこに人がいるわよ!?!」

「なんだって?」

と、マリナの言葉にジョージがそう言う

「ほら、あそこのビルの屋上!」

と、そう言いリユウたちはその屋上を見る。するとリユウは

「あれは……結城さん?」

「はあ……はあ、まさかエレベーターが故障していたなんて……」

俺は子供を安全な場所へ避難させた後元の場所に戻っていた。しかも今度は指示のしやすいビルの屋上にだ。そうしたほうが声も届きやすいからだ。だがあいにくエレベーターは壊れていたため階段で昇った。だがさすがに十階以上の階段は正直言っつきつい。やっぱ地上の方が良かったかな……。そう思いながら俺は星子のいる方へ向いた。そして今の現状、星子ことバキシムはサラマンドラと相撲を取っていたが、バキシムはサラマンドラを抱え上げそして放り投げた。すると放り投げられたサラマンドラはバキシムに向かって炎を吐くが、するとバキシムは両腕を大きく上げ、そして下に下げるとバキシムの前にバリアが張られ炎はそのバリアによって防がれるのであった

「おい、あれって、エースのウルトラネオバリアーじゃねえかよ。星子の奴いつの間にあんな技を覚えたんだ?」

そうバキシムがしたバリアはかつてバキシムがウルトラマンエースと戦った時エースがバキシムの火炎攻撃を防いだウルトラネオバリアーだった。そして俺は

「星子！少年は俺が安全な場所へ避難させたぞ！サラマンドラにとどめだ!」

と、そう言うバキシムは頷きサラマンドラに向かって鼻や腕からビーム攻撃をする。そしてそのビームはサラマンドラの喉に命中する。しかし喉にベルトみたいなのをしているためか致命傷には至らなかったもののサラマンドラはダメージを喰らう。そしてサラマン

ドラはバキシムを一睨みすると地面を掘って逃げてしまった。そしてそれと同時にメルバとの決着がついたのかメビウスがバキシムの前に降り立ちメビウスはバキシムに向かって構える。それを見た俺は

「バキシム！メビウスと戦う必要はない。戻れ！」

と、そう言いバトルナイザーを上げてそう言うが

『ちよつと待つてください和人さま。さすがに街をこのままにはしておけないです』

と、そう言うのとバキシムはメビウスの方へ向きそして両手を広げ何かの光線を放つ。それを見たメビウスは警戒するがそのビームはメビウスではなく壊れたビルなんかに当たりそして壊れたビルは元の姿に戻った。そしてバキシムは他にも壊れた道路や建物にもそのビームを放ち元に戻す。そして大方のビームを放った後、バキシムは光に包まれ、ある方向へと飛ぶメビウスはその光の行方を見ているとその光はとあるビルの屋上にいる和人の持つているバトルナイザーに格納される。それを確認した和人はメビウス方を向きそして不適の笑みを見せるとその場を後にするのであった。

ガイズ本部

「それにしてもあの少年……いったい何者だ？」

あの事件が終わった後、ガイズ基地では先ほどの騒動とそしてバキシムを操っていた少年和人について話していた。そしてメインスクリーンでは先ほどリユウたちがとった戦闘の映像とそしてビルの屋上にいた和人がバキシムをバトルナイザーで指示していた姿が写っていた

「まさか、宇宙人。いやヤプール人じゃないだろうね？」

「いいや補佐官。以前俺とミライは結城さんに会ったことがあるが彼は宇宙人ではないって否定していたぜ？」

「それに彼に目を見ましたが嘘をついている目ではありませんでした」

「それにもし彼がヤプール人ならメビウスを助けたりバキシムに壊れ

た街を直させるようなことは指示しないだろう？」

「う、うむ…：いわれてみれば」

ミライやリユウ、そしてジョージがそう言うのとトリヤマは頷く、そしてサコミズは

「とにかく、いまは彼のことだ。もしかしたら前の黒い怪獣も関係がある可能性がある。もう一度彼と話さなければいけない」

と、そう言いサコミズは画面に映っている和人を見てミライは

『結城さん…：あなたは一体何者なんだ？』

一方、バキシムと和人はバスで北川町まで帰っていた

「今日はご苦労だったな星子」

「いや〜今日は久しぶりに暴れて満足だったですよ和人さま」

「そうか。そう言えば星子。お前さっきのサラマンドラ戦でウルトラネオバリアーを使っていたけどあれは…：?」

「あくあれですか？以前エースと戦った時に私の自慢の火炎攻撃エースに防がれちゃった拳句にエースのウルトラスラッシュで首をスパアーンてやられちゃったじゃないですか？あの後怪獣墓場にいたときあの時の悔しさが忘れられなくてだから少しでも見返してやろうかなっと思っただけでエースの技とか覚えようとしたんですよ。まあさすがにメタリウム光線はできなかつたんですけど…：バリアーとサーキュラーギロチンはできるようになりました」

「す、すごいなそれ…：?」

「それよりも和人さま」

「ん？なんだ？」

「ちよつと寄り道していいですか？いえ、場所はすぐ近くの港なので」
「?…いいぞ」

俺は頷きそして俺と星子は北川町に着くと、そのままアパートには行かず、すぐ近くの港に来る。そこには船があるけどこれといって

夜景が奇麗とかそう言うのはなかった。

「なあ、星子。ここに何かがあるんだ？何もないぞ？」

「まあ、待っててください。もうすぐ来るんで」

「来る？」

俺が首をかしげると俺と星子の前にある水面がブクブクと泡立ちそしてそこから何かが飛び出てきた。それは……

「オ、オイルドリッカー!? と言えば星子、銀座でオイルドリッカーと何か話していたみたいだけど、まさか……」

そう、先ほど銀座で暴れていたオイルドリッカーであった。

「はい。そうです。実は頼みがあるんですがこのオイルちゃん身寄りがないみたいなんです。ですから彼女を仲間にしてくれないですか？このまま一人ぼっちじゃ可哀そうなんです。頼みます同じ超獣仲間を見捨てるなんて私にはできないです！」

と、星子が両手を合わせて必死に頼み込む。俺はオイルドリッカーの方を見るとオイルドリッカーはまるで捨てられた子犬のような目で俺をじつと見ている。そして俺は

「オイルドリッカー。俺たちと一緒に来るか？」

と、そう言うオイルドリッカーは嬉しそうに頷く。どうやら仲間になる気満々みたいだ。すると俺のバトルナイザーは光りだし俺はバトルナイザーをオイルドリッカーに向けるするとオイルドリッカーはバトルナイザーから放たれた光に包まれそしてバトルナイザーに吸い込まれるのであった。俺はそれを確認すると星子は

「ありがとうございます和人さま」

とお礼を言い俺はバトルナイザーを掲げ

「出てこいオイルドリッカー」

と、そう言うバトルナイザーから小さな光が出てその光は人型に変わる。そして現れたのは肩まで伸びた深緑色の髪をした少女であった

「あ……あの初めまして和人さん。わ、私は超獣のオイルドリッカーです」

と、おどおどしながら礼儀正しくそう言う星子は

「大丈夫だよオイル。和人さまはそんなに怖い人じゃないから、ま、龍子は怖いけど。これからよろしくな」

「はい。バキちゃんもよろしくお願いします。そして和人さん。小心者ではありませんがよろしくお願いします」

少し微笑んでそう言う俺は不適の笑みで

「いいってことだよ。さて急いで帰らないと龍子に怒られるぞ」

「あ、そうでしたね。じゃあ行こうかオイルちゃん」

「うん」

と、そう言い俺たちはアパートへ帰るんだっただが……

「おかえり……随分と遅かったじゃないか#」

「た、ただいま……」

アパートについた時俺たちを待っていたのは眉間に青筋を立てて仁王立ちをしていたゴジラこと龍子であった。まあ時刻はもう夜中、龍子が怒るのも無理はない

「ニュースで見ただぞ。銀座で迷子になった拳句、その上怪獣相手に派手に暴れたらしいじゃないか星子……」

「ゴ、ゴジちゃん……あ、あのね……その……これには訳が……」

「言い訳無用!!ちよつと来な!!」

「いててて!!ゴジちゃん耳たぶ引つ張らないで〜」

と、星子は龍子に耳たぶを引つ張られ涙目になって言うが龍子はお構いなしに星子を居間へ連行する。そして俺は台所にいる襟華のもとへ行き

「襟華。ただいま。あ、これ銀座のお土産な」

「おかえりなさいマスター。あれ?そちらの方は?」

「ああ、こいつは新しく俺の仲間になったオイルドリinkerだ」

「お、オイルドリinkerです。よ、よろしくお願いします」

お辞儀をして挨拶するオイルドリinkerに襟華はふふつと微笑み

「私はエレキングよ。人間での名前は友里襟華だからよろしくね。オイルドリinkerちゃん」

「は、はい。よろしくお願いします!!」

と、オイルドリinkerは笑顔でそう答えるのであった。そしてその

後、俺たちは新しく仲間になったオイルドリッカーと一緒に夕食を食べるのであった。

因みになんだが夕食後、俺と星子は先の銀座の件で龍子に長い説教を喰らうのはまた別の話……

第7話

「ごめんなさいマスター。買い物荷物持ってもらって」

「いいって、いいって襟華。それより今日の夕飯どうする？」

「そうですね〜今夜はいいのが買えましたし、それに今日はオイルドリッカーちゃんが私たちの家族になったし、記念のお祝いに今夜はシチューにしようと思います♪」

「おおー！今夜はシチューか!!今夜はご馳走だな!!龍子や星子たちが訊いたら喜ぶぞー!」

「うふふ。もう、マスターたら」

俺の言葉に襟華は微笑んでいると、急に俺たちの前に一台の車が止まる。その車のボディにはガイズと書かれていた。そしてその車からガイズの人らしき二人組が降りてきて

「結城和人さんですね?」

そう訊くと襟華は警戒したように身構えようとするが俺は手で制し

「ああ、そうだけど?」

と、答えると

「すまないが、ガイズ本部に来てもらおうか?」

北側町のアパート

「へ〜油良で、アストロモンスと戦った初代オイルリンカーなんだ」
「はい。そうなんですよ星子。アストロモンスさんと喧嘩したんです
がどうも向こうが喧嘩が強くて、ぼこぼこにされたんですが私も超獣
の端くれ、せめて超獣の意地として一矢報いようとアストロモンスさ

んに得意の角攻撃でつつこんだのですが、そのまま捕食されてしまいまして……で、息苦しい助けて!!と思つて死に物狂いで暴れたら気が付いたら銀座にいたんですよ〜」

あの銀座事件の後、怪獣とかは現れず、いたって平凡な毎日が続いた。まあ、誰かの（間違いなくガイズ）視線とか感じるのだが極めて平和だ。因みに星子と話をしている油良と呼ばれた緑髪の少女はあの銀座に現れたオイルドリンカーだった。そして彼女は今、油良真純と名乗って旧友であるバキシムこと星子と一緒にお茶を飲みながら家の留守番をしていた

「それにしても和人さんと襟華さん遅いですね……それに龍子さんも」

「龍子は、アルバイトしているし遅いのは当たり前だよ油良。でも確かに油良の言われた通り、買い物に出かけた和人さまや襟華が遅いはちよつと心配だね……」

「そうですね……何事もないといいけど……」

と、そう言うと星子が

「ねえ、油良。久しぶりにアレ歌わない？ほら、超獣訓練学校で歌った歌」

「え〜あれですか？私アレにいい思い出が無いですけど……」

「いいじゃ、ないかよ〜私つと油良、それにベロクロンと出会つて共に歌った歌じゃないかよ〜」

「もう〜しようがないな〜」

と、油良はため息をつきそして息を吸うと……

「おっおっおー♪オ〜レたつち無っ敵の超獣軍〜♪!」

「恐るるものなどなにもない〜♪」

「オ〜レたつち無敗の超獣軍〜♪人類、ウルトラぶつ殺す〜♪」

「おっおっおー♪オ〜レたつち無っ敵の超獣軍〜♪!」

と、二人が陽気に歌っていると

ゴツンツ!!ゴツンツ!!

「うにゃあー!!」

と、いきなり二人の頭上に拳骨が落ち、二人はあまりの激痛にしや

がみ込む。すると

「二人とも……陽気に歌うのはいいが声がでかすぎるし、うるさい。近所中に聞こえているぞ#」

と、二人の後ろにはバイトを終えて帰ったゴジラこと龍子が仁王立ちしていた

「あ、リュ、龍子……お帰り」

「うゝ痛いゝ」

星子は頭を押さえて苦笑で龍子にそう言い、油良は涙目になっていた

「ああ、ただいま二人とも。あれ？襟華と和人は買い物か？」

「あ、うん。そうみたいだけど。ちよつと遅いよね？」

「携帯で連絡とったのか？」

「いいや？……ん？アレ？」

と星子が首をかしげると急に星子の頭にバキシム特有の角が伸びる

「ん？どうしたんだ星子。急にバキシムの角を出して？」

「あ、いやゴジちゃん。なんか急に電波が私の角に届いてさ」

「電波？」

「うん……あ、襟華からだ」

「エレキングさんからですか？」

「ああ、そう言えばあいつの能力電気を出すだけじゃなくて電波出して仲間と通信できたりするんだっけな……」

と、龍子と油良がそう話していると

「……ええー!?!」

「っ!?!」

と、星子がいきなり大声を出し二人がビックリする

「ど、どうしたの星子!?!」

「た、たたた大変だよ!?!」

「落ち着け。何が大変なんだ星子？」

と、ゴジラがそう言うとき星子は

「カ、和人さまと襟華がガイズの連中にさらわれたあー!!!」

「な、なんだとおー!!!?」

ガイズ本部

急にガイズの人たちに拉致?された俺と襟華。二人の警備員らしき二人組に連れて行かれ着いた場所は、テレビで見たあのガイズの作戦室であった。そしてその部屋には未来屋流などのお馴染みのガイズメンバーがいてそしてその正面には

「やあ、どうも桐ヶ谷君。急に連れてきてすまなかつたね。私がこのクールガイズの隊長のサコミズだ。」

「あ、どうも……」

俺はなぜか、襟華と一緒に急に現れたガイズの隊員にガイズ本部に連れて行かれた。まあ、実際にテレビで見たガイズルームを生で見られたのはいいが、できればこういう形で招待されたくなかった。

「まあ、そんなに固まらなくていいよ。コーヒーでも飲むかい?」

「え?えつとその……」

と、フレンドリーに接するこの人がガイズジャパンの隊長であり本当の正体はガイズ日本支部総監である。後、余談だが、彼の中身の人ってゴジラ映画にも自衛官として登場しているがそれは別の話に……

俺がサコミズ隊長の言葉に少し苦笑していると、隣にいる襟華はマリナやコノミの方へ顔を向け

「あ、あの……すみません。冷蔵庫ってどこにありますか?」

「あ、えつと。冷蔵庫?」

「はい。買い物袋に生ものとか冷凍物が入っているんですけど?」

「ああ、それだったら私が預かって冷蔵庫に入れますよ」

と襟華は困った顔をしてミライたちに言うと言とうとコノミが買い物袋を預かり部屋を出る。そんな中、リュウは俺の方をじっと見て

「結城さん。あんた、一体何者なんだよ?」

「え?何者つてごく普通の一般市民だけど?」

と真剣な目で俺に言う中、俺は少しとぼけて言うのとトリヤマ補佐官ことトリピーが

「とぼけても無駄だよ君。君が銀座でバキシムを操っているのはわかっているんだよ?」

「そうですよ。嘘をついてもこの証拠があるんだからね」

と、彼の副官であるマル補佐官秘書 がそう言いスクリーンに前の銀座事件の映像を流しそして俺が星子に指示を出している映像が流れる。ああ、やっぱあの時、見られたというより撮られてたのか。調子に乗ってビルの屋上に出たのは失敗だったな。そう思っていると「結城さん。本当のことを言ってください。あなたは本当は何者なんですか?」

「ミライ君の言う通りですよ。それにどうやって怪獣を操っていたんですか?」

ミライとテツペイに問いただされると襟華は

「(マスター。どうします?何なら私、電撃を出してガイズの皆さん気絶させて逃げましょうか?)」

「(いや、待て襟華。これ以上問題を大きくするのはまずい。それに逃げて俺たちの住所はすでに知られてるし意味がないよ)」

「(それではどうしろと?)」

「(こうなったら仕方がない。言える範囲の所まで言った方がいいな。無論全部本当のこと話すわけにはいかないけど)」

「(マスター・・・わかりました。でも万が一マスターの身が危なかった場合は、襟華・・・いえ、このエレキング。全力をもってマスターをお守りします)」

「(ああ、その時は頼む)」

と、目線で会話し、そして俺は頷くと

「わかりました。ではちゃんと説明しましょう。私は・・・」

と、そう言いかけた時、急に基地内にサイレンが鳴り響く

「な、何事かね!」

と、トリヤマ補佐官が驚くと・・・

ピキイ!!

「「っ!!」」

急に俺たちの前の空間にヒビが入る無論壁ではない。この世に空間にひびを開けられる奴としたらもう、あいつしかないな。そう思った時、

バリーーン!!

とその空間が割れてそこから

「和人さま大丈夫ですか!!救出しに来ました!!」

と、その割れた空間からバキシムこと星子が現れ、そして

「和人さんを返して!じゃないと痛い目に合うわよ!!」

「おい、二人とも無事か?で、どいつをぶん殴ればいいんだ?」

星子に続き白い鉢巻をしてフライパンを片手に持つ油良と頭を掻きながら殺気を込めた目をしガイズの隊員を睨む龍子が続いて空間から出てくるのであった。

「襟華。もしかしてお前が?」

「はい。一応、星子たちに連絡はしました」

第8話

ガイズに事情徴収として連行された俺と襟華だったが、突如俺と襟華を救出すべく星子たちが異次元を通って、ガイズ基地に殴り込みに来たのだった

「和人様や襟華を返せ!!さもないと痛い目みるぞ!!」

「おら、まずどいつが相手だあ?相手になつてやるぞ?」

「二人を返してください!さもないとこのフライパンで殴りますよ!フライパンって結構いたいんですよ!!」

と、三人がそう言うのと

「な、なんだね君たちは!?!」

「おめえら、やつぱり宇宙人か!」

「ほうくやるか人間。こちとらいつ喧嘩おっぱじめても構わないんだぞ?」

トリヤマが驚いて言い、リュウたちがトライガーシヨットを構える。それを見た龍子たちは殺気を出して身構えるが俺は手で制し、

「待て、こつちからは発砲するな」

「しかし和人さま!こいつらは和人さまや襟華たちを誘拐したんですよ!?!」

「誘拐じゃないよ星子。ただの事情聴取だ。まあ、いきなり連れてこられたのはびっくりしたがな」

と、そう言い俺はミライたちを見て、

「すまないけど銃はしまつてくれるかな?ミライさんやリュウさんは知っていると思うがこいつらは俺の知り合いなんだ。それにさつきも言った通り俺が何者なのか説明しますので」

と、真剣な気持ちと言うと、その俺の真剣な目を見たサコミズ隊長は

「わかった。君の話を聞こう。みんな銃をしまつてくれ」

「しかしですよサコミズ隊長!?!こいつらは・・・」

「トリヤマ補佐官。まずは話し合うことが大切です。互いに武器を構えていたら話が進みませんしね」

とにこやかな表情でトリヤマ補佐官をなだめるサコミズさんに俺も

「龍子たちも落ち着けて、それに今ここで争ってもなんも得にならないしな。龍子もそれでいいか？」

「ちい！仕方ないわね」

と、興がそれたのかつまらなそうな顔をしゴジラは頭をボリボリと掻き不機嫌そうにそう言う。そして怪獣のリーダー格の龍子が言う
と星子も由良も武器や拳を下げて大人しくなる。するとミライが

「では結城さん。あなた達は一体何者なのですか？」

と、改めてそう訊くと俺は

「離せば少し長くなるんだがな……」

と、そう言い俺は話すのであった。

「……異世界から来た？」

「ああ、信じられないかもしれないけどそうだ。俺のいた世界はこことは違う世界で、怪獣とか宇宙人とかウルトラマンはテレビや映画などの空想の産物で物語の中での世界なんだよ」

「なるほど……そう言うことか」

「隊長。何がそう言うことなんですか？」

「ああ、実は前に警察にいる知り合いに結城君のことを調べてもらったんだが、どうも君の戸籍はあいまいなとか何者かに後から強制的に付け加えたような感じがあったんだ。もし彼が異世界から来たということが本当なら納得がいく」

「ではサコミズ隊長は彼の言うことを信じるのかね？」

「はい。トリヤマ補佐官。彼の目を見ても嘘をついているような目ではありませんからね」

恐らくそれはあの神様だな……そう言えば俺たちが転生する前に「戸籍については私がいろいろとやりくりするから」とか言っ

いたけど、結局バレてんじゃん……

「……さて、結城君。君についてはわかったが、ここからが本題だ。君は、銀座の時バキシムを操っていたみたいだけど、どうやって操っていたのか教えてくれないか？」

「あれは操ってなんかいない。互いに信頼し合い協力していただけだ」

「どういうことですか？」

テツペイの言葉に俺は懐からネオバトルナイザーを取り出し、机に置く

「これは……」

「ネオバトルナイザーというアイテムだ。簡単に言えばポ○モンのモン○ターボー○みたいなものだよ」

「へくまるでセブンのカプセル怪獣のような物か……」

「あ、あのそれ、どこで手に入れたんですか？」

ジョージが納得した顔をしテツペイが興味津々な顔で見ていると

「これは手に入れたというよりか……ある人に貰った」

「ある人って誰？」

「うくん……何というか偉い人？かな」

「なぜ、疑問形なんだ？」

マリナの質問に俺はあの神様のことを思い浮かべてそう答えるとマル補佐官が首をかしげてそう訊くと、コノミさんが

「ねえ、さつき、結城君は異世界者って言ってたよね？」

「え？ああ」

「じゃあ、その後ろにいる子たちも結城君と同じ世界の子たちなの？」

と、そう訊くと俺は首を振り

「いいや、彼女たちは俺とは違う世界出身の子もいればこの世界出身の子もいるよ」

「つまりどういうことですか？」

ミサキさんの言葉に俺は

「そう言えば彼女のことを話していませんでしたね。龍子名乗っても

「らつてもいいか？」

「なぜだ？」

「いや、さつき星子のあれで人間じゃないってばれてるし、こころで名乗らないとまずいかな〜っと思っただけ。それにたとえ相手が敵であろうがなからうが名乗らないのは失礼だしな」

「・・・はあくまったくお前は本当にお人好しだな。わかったよ。俺も礼儀知らずじゃないし・・・名乗るのは人間としての名か？それとも本名の方が和人」

「どっちでも構わないよ」

「わかった。じゃあ、名乗ろう。おい星子、由良」

「うん、わかったよ。ゴジちゃん」

「わかりました挨拶は大切ですよ」

とそう言い龍子が立ち上がるのと同時に星子たちも立ち上がりそして

「私の名はゴジラ。先日現れた黒い怪獣とはこの俺だ。人間としての名は芹沢龍子って名乗っている」

「は〜い。私の名前は北星子。本名はバキシムです!!銀座でサラマンドラを戦ってたのは私だよ〜♪」

「わたくしは友里襟華・・・本名はエレキングです」

「わ、私は油良真澄・・・本名はオイルドリinkerです・・・」
「「え!?!」」

龍子たちの言葉にみんなは固まってしまふ。サコミズなんか手に持っていたコーヒをうっかり落としてしまふ

「え・・・え・・・と・・・どうということ?この三人がああエレキングやバキシム?」

「どう見ても人間じゃん」

「でも、言われてみればさつき空間を開けたあの技はバキシムのですしたよね?」

「結城君。これはどういうことですか?」

美咲さんがそう訊くと俺は

「俺のバトルナイザーには仲間にした怪獣や宇宙人を擬人化して登場

させることができるんですよ」

「えっ!? 怪獣を擬人化!?!」

「すごいじゃないですかそれ!?!」

俺がそう言うのとテツペイやコノミが興奮してそう言う。するとミライが

「結城さん。あなたのことはわかりましたけど、あなたたちはこれからどうするつもりなんですか?」

「どうするもこうするも普通に暮らすに決まっているじゃないか。俺たちは地球侵略とか、そう言うのはないし」

「でも、この前の時も銀座の時も怪獣を出したじゃないか」

「ああ、あれはアーストロンとテレスドンがエレキングの作ったシチューを台無しにしたことでゴジラが説教しに行ったんだよ。銀座も件も逃げ遅れた子供を助けるため。俺としては向こうから手を出さない限り、モンスロードをする気はないよ」

「俺は別にどちらでも構わないが、強いて言えば向こうが喧嘩売らなければ、俺も買って暴れる必要はないからな」

「私もそうっすよ」

「私は争いごとが嫌いですて……」

「私事です。無用な戦いはできればしたくないですから」

俺たちが敵意がないことを示して言うのとトリヤマは

「なるほど、君たちが侵略者ではないことはわかった。そこでなんだが結城君。君に提案がある」

「提案? 何でしょうか?」

「提案というのは他でもない。君たちを我がCREW GUY'Sジャパンで保護したいのだが」

「保護?」

「うむ。君たちが侵略者でない。しかしだ。怪獣を操ることのできる人間がもし住宅地に住んでいることが一般の市民に知られたら、君たちは近所から変な目で見られてしまう。下手をすれば石を投げつけられるかもしれない。そこで君たちはここに住んでもらいたい。もちろん衣食住は保障する。どうかね?」

とそう言うが、俺は首を横に振り

「お断りします」

「な、どうしてだよ?」

「どうしてってリユウさん。よく考えてみてください。一般市民がG U Y S に保護されたということがもしマスコミや一般市民が知れば、きっと保護されたのは宇宙人だ。なんて言われ、それこそ俺たちは街中を歩けにくくなりますよ? こう言うのはいつも道理に普段通りでいいんじゃないですか?」

俺がそう言う。確かにトリヤマさんの言うことは魅力的であり俺たちを悪いように利用とかはしないと思うが、絶対にとは言い切れない。それにさつきも言った通り、一般市民がG U Y S に保護されたなんて世間が聞けば、きっとその市民には何かあると疑うはずだ。……時にあの文字通り蛭みたいなマスゴミの蛭川が知ればきっと、徹底的に調べるはず。そしてもし正体がバレれば俺はともかく龍子や星子たちのことを悪く言うに違いない。

そんな危険を冒すよりもいつも通りに生活すれば、危険性が下がるし、それ以前に

「それに俺たちを保護したとしても俺はともかく、龍子たちを利用するとか人体実験場とかに送るとかそういう考えはないですよね?」

そう、俺が心配しているのは龍子たちのことだ。怪獣が人の姿になって生活をしていることをG U Y S のお偉いさんが知れば必ず彼女たちを拘束し、彼女たちを。人体実験だとか良からぬことで調べるであろう。もしそうなれば龍子たちの安全は保障されないし、それに家族である彼女たちに何か良からぬことをしようとするれば俺は彼女たちを守るため鬼なり修羅なりとなるだろう。俺がそう言うときサコミズは首を横に振り

「そんなことは絶対にさせない。彼女たちは君にとって大切な家族なんだろう?」

「ええ、たとえ怪獣でも、俺にとってはかけがえのない大切な家族ですサコミズさん」

「そうか……で、君は本当にこちらに来る気はないのかな?」

「うーん・・・魅力的な話ではあるんですが、今の生活も気に入っているんで、それにいきなりそう言われても困るので少し考えさせていただきます。それとそろそろ帰っても構いませんか？これからオイルドリンカー・・・言え油良の歓迎パーティーをするんで」

「そうか・・・今日はすまなつかね」

「いいえ、それじゃあ、みんな家に帰ろうか・・・て、あれ？星子どうしたんだ？」

俺がそう言うのと星子がなんか気まずそうな顔をしているのに気が付きどうかしたのか訊くと

「あ、あの・・・和人さま。次、実に言いにくいんですが・・・その」

目をそらして汗を流す言う星子に

「お金持っていますか？」

「え？どういうこと？」

いきなりの言葉に俺は目を丸くすると。星子は何かの紙を出して俺に渡す。その紙には請求書と書かれていた

「星子・・・これは何の請求書だ？」

「それはその。和人さま。私の能力は異次元を通れることは知っていますよね？」

「ああ、それがどうかしたの・・・て、まさか」

「はい・・・これは異次元を通した時の請求書です」

「え!?あれ金取られるの!？」

「は、はい・・・異次元ゲートって無料なものもあるんですが、今回は事態が事態だったので有料の異次元ゲートを使ったんです」

「有料って・・・あれか一般道路と有料高速道路みたいなものか？」

「は、はい人間の世界で例えるならそうです・・・すみません」

「いいっていいって。気にするなよ星子。俺や襟華を助けるためだったんだろ？どれ？」

と、俺はその請求書に目を通す。その瞬間、俺の体は凍りついた。

「ぜ、ゼロが6個!?一回使っただけで!？」

「は・・・ハイ。本当にすみません」

俺が焦って困る中、星子が申し訳なきように謝る。この金額、俺の貯金で払えるかどうか難しい。すると、サコミズが

「和人君。だったらそのお金私たちが払おう」

「え!?何を言っとるのかねサコミズ隊長!」

「トリヤマ補佐官。もとはといえれば私たちが彼を無理やりここに連れてきたのが原因だしね。ここは我々が支払うのが当然じゃないんじゃないかな?」

「でも、そんなこと訊いて総監が納得するかね?」

「その件なら私が総監に話しておきます」

ミサキさんがニコツと笑顔でそういうと、龍子は

「礼は言わないわよ。それにこれで貸しを作ったなんて思わないで」

「ああ、これは貸しではないよ」

「ならいい……」

とそう言い、俺たちは帰る準備をしようとした瞬間。急に地響きが始める

「な、なんだ!?!」

みんなが驚く中、基地内に警報が鳴り響き、パソコンで状況を確認したコノミが

「基地の外で怪獣が出現しました!!」

と、そう言うのと同時に画面から二体の怪獣が現れる。その怪獣とは……

「あれは……ゴルザにシルバゴン!」

GUY Sの基地に現れた怪獣はメビウスたちの世界に存在しない。ウルトラマンティガなどの平成ウルトラマンシリーズに出てくる怪獣の超古代怪獣ゴルザと剛力怪獣のシルバゴンであった

第9話

「あれは・・・ゴルザにシルバゴン!」

ガイズに連れてこられた俺たちは何とかガイズの人たちと話し合
いで解決でき、家に帰ろうとしたとき、突如、ガイズの基地近くの広
場。そうガイズとグドンが初めて戦ったあの広場で二体の怪獣が現
れた。その二体は昭和・メビウスらのウルトラマンシリーズの怪獣で
はなく別世界の平成ウルトラマンシリーズのウルトラマンティガに
登場する怪獣、超古代怪獣のゴルザ。そして平成のレッドキングと言
われるシルバゴンであった

「な、なんなんだね、あの怪獣は!?!しかも二体!?!」

トリヤマが驚き、コノミがパソコンでデータを調べるが

「この怪獣はデータがありません。新種の怪獣です」

と、そう言うところサコミズが

「結城君。先ほど君はあの怪獣たちを『ゴルザ』『シルバゴン』と呼ん
でいたけど。君はあの二体の怪獣のことを知っているのかい?」

と、そう訊きガイズのメンバーは俺を見ると俺は頷き

「ああ、あの二体の怪獣は別世界のウルトラマンの世界に登場した怪
獣だ」

「別世界のウルトラマン?」

ミライが不思議そうに訊く中、俺は

「すみませんコノミさん。パソコン借りてもいいですか?」

「え?はい?」

そう言いコノミさんは席を空けて俺は椅子に座り、自分のバトルナ
イザーをパソコンのケーブルにつなぐ

「なにしてんだよ?」

リュウがそう訊くが俺はバトルナイザーを動かした後、手慣れた手
つきでパソコンを動かす

「ああ、俺のバトルナイザーに内蔵されている怪獣時凶鑑のデータを
パソコンにつなげているんだよ」

「マスター?パソコン得意なんですか?」

「元居た世界ではメカトロニクスとかそういう系の職を目指して勉強していたからな……お、あつた。これだ」

そう言い俺は画面表示にバトルナイザーからダウンロードした三枚の画像を見せる。一つは今外に現れたゴルザとシルバゴン。そしてもう一つはその二体の怪獣がいた世界のウルトラマン。ウルトラマンティガの画像だった

「これは……ウルトラマン？でもなんか見たことのないウルトラマンだな……カラフルだし」

「結城君。このウルトラマンがあのだ二体の怪獣のいる世界のウルトラマンなのかね？」

「はい。このウルトラマンの名は『ティガ』ざっくり説明すると「タイプチェンジ」を取り入れたウルトラマンであり、ベースのマルチタイプ（から素早さを重視した青紫のスカイタイプ、力を重視した赤いパワータイプにチェンジして、臨機応変に戦うことが出来るウルトラマンなんです」

「そんなウルトラマンがいるんだ……」

「今はウルトラマンのことはいいから、あの怪獣について説明したまえ」

「ああ、そうでしたね。コホン、まずは超古代怪獣ゴルザ。頭部や顔の外側や喉元を覆う鎧の様な皮膚が特徴でウルトラマンティガが初めて戦った怪獣です。必殺技はパワフルな外見通りパンチや頑丈な頭部の鎧を活かした頭突きなどの技の他は額にエネルギーを集めて発射する超音波光線で、紫の光線を一直線状に撃つのが特徴です。続いては剛力怪獣シルバゴン。これも同じくティガと戦った怪獣です。獅子鼻樹海の異次元空間を根城にしていた怪獣、名前の通り銀色のボディに赤いラインが入った姿をしていて、武器は300万馬力の凄まじいパワーを活かした肉弾戦。頭突きや尻尾攻撃、噛み付きなどを得意としており、パワータイプのティガすら圧倒する実力者。ファンの間では『平成のレッドキング』と言われていて……」

少し興奮気味で説明する。その姿に皆は少し引いた表情をしていた。だが、テツペイの場合は目をキラキラさせメモを書きまくっている

た。すると龍子が

「和人長い。いい加減にしろ」

「あ、すまんすまんつい、説明に熱が入ったよ……と、言うわけです皆さん」

「な。なるほど……で、この怪獣に弱点はないのですか？」

苦笑しながらミサキさんが聞くと

「シルバゴンは目の視力が弱いので動いている者にしか反応しません。ゴルザは……」

俺がそう言いかけた時

「あれ？和人さま」

「ん？どうした星子？」

「なんかあの二体の様子がおかしいです」

「なに？」

星子の言葉に皆は画面を見ると。確かにあの二体の様子がおかしかった。シルバゴンが地面に膝をついて何か慌てた様子で何かを探していてとなりにいるゴルザはシルバゴンに攻撃する気配もなかった肩をポンポン叩き何か励ますような仕草をして一緒にシルバゴンと一緒に何か探していた

「何をしているのでしょうか……あの二匹」

「暴れているようには見せませんね……何かを探している？」

「ゴルザもなんか手伝っているみたいだけど……」

ガイズメンバーは二体の怪獣を見てそういう。そして龍子は

「で、どうする和人。あいつらしばき倒せばいいのか？」

「何でそうなるんだ。まだ何も破壊活動してないだろあの二匹」

「そうですね。それに見た所、何か探しているみたいですし。いきなり殴りかかるのはかわいそうじゃありませんか？」

「ま、それもそうだな。ただいるだけで攻撃されたらたまつたもんじゃないしな。まあその時はやり返せばいいんだけど」

俺と由良がそう言うのと龍子も納得した表情を見せる。すると星子が

「じゃあ、なにしているか聞けばいいんじゃないですか？職務質問み

たいに」

「聞くってどうやって。相手は怪獣なんだぞ?」

「過去にピグモンの言葉を翻訳したとドキュメントSSPに記録されていますが、それを使って翻訳できるかどうか・・・仮にできたとしても準備がかかります」

「その間にあの二匹が街に入るとまずいな」

そう話していると襟華が手を小さく上げ

「あ、あのすみませんマスター」

「ん?どうしたんだ襟華?」

「あの・・・その。私をモンスロードしてくれませんか?」

「え?」

「私がああの二匹のところに行って事情を聴いてきます。人間だと恐らく二匹の言葉わかりませんから」

襟華がそう言うと、ジョージが

「確かにそれはあるが・・・」

「それにサイズやウルトラマンの仕事は悪い宇宙人や怪獣を退治するためですよ?あの二匹が何もしていないなら下手に出撃して相手を刺激させないほうがいいと思います」

「なるほどこの子の言葉にも一理あるな・・・」

「そうですね。怪獣界では人間の防衛隊に会ったら注意しろなんて言われていますし、ここでサイズの皆さんが出撃したら暴れてしまう可能性がありますね」

サコミズと由良が頷くと俺は

「襟華・・・説得頼めるか?」

「はい。任せてくださいマスター。もし話がこじれ二匹が暴れるようなことがあれば、被害が大きくなる前に私の電撃で二匹を気絶させます」

「そうか・・・じゃあ頼む。サイズの皆さんもいいですか?」

「君の判断に任せよう結城君。襟華さん。成功することを信じているよ」

「サコミズ隊長。いいんですか?」

「ここは彼らを信じるとしまししょうトリヤマ補佐官。ただし万が一に備えて私たちはすぐ出れるように準備するがいいかね結城君？」

「構いません。ですが襟華は攻撃しないでくださいね」

「わかった」

俺はサコミズ隊長の言葉に頷きもう一度、襟華に顔を向ける

「よし、じゃあ襟華。頼むぞ」

「はいー」

俺の言葉に襟華は強くうなずき、俺はバトルナイザーを襟華に向けると襟華の体は光ってそしてバトルナイザーに吸い込まれる。そして俺は襟華がバトルナイザーに入ったことを確認し、ぼとるないざバトルナイザーをモニターに向けて

「行けっ！エレキング!!」

そう叫ぶとバトルナイザーが光りだし

『バトルナイザーモンスロード!!!』

とその声とともにバトルナイザーから一体の怪獣が現れ、ゴルザとシルバゴンの前に現れる。その怪獣はウルトラセブンと戦った有名な怪獣の一人で宇宙怪獣であるエレキングであった。そしてそれを見たガイズたちは目を丸くしコノミさんは

「本当にあの子がエレキングだったんだ……」

と、驚いた表情をしていた。そして俺は

「エレキング。あの二匹の怪獣のネゴシエーション。頼むぞ！」

そう言うのであった。こうして人類では初の怪獣と怪獣同士の交渉が始まるのであった

第10話

突如G U Y S基地に現れたシルバゴンとゴルザ。だが、その二体は破壊活動をせずに何かを探している雰囲気であった。それを見たG U Y Sメンバーと和人。すると襟華エレキングは二体と交渉してみると和人に提案し、そしてエレキングの姿に戻り人類では初の怪獣と怪獣同士の交渉が始まったのだ

「大丈夫かな?」

ジョージがそう言うとき星子は

「大丈夫ですよ。襟華、礼儀正しい子だから。きっと平和的に解決してくれそうですよ」

「そうだといいんですがね?」

星子の言葉にテツペイがそう言う。するとエレキングこと襟華が探し物をしているゴルザとシルバゴンに近づき『どうかしたの?』と言いたげにゴルザの肩をポンポンと叩くとゴルザはシルバゴンを庇うように前に立ち何やらエレキングに向かって吠え出した

「なんて言っているんだね?」

「補佐官そんなこと言われても私たち怪獣語なんてわかりませんよ」

「あ、じゃあ私が通訳します」

怪獣語が分からないみんなのために由 オイルドリンカー 良が通訳をするというコホント咳払いすると

「えつとですなまず襟華さんが二体に対し『どうしたの?』と訊きました」

「そんなことは見ればわかる。あのゴルザとかいう怪獣はなんていったのかね!」

「はい…えつと…『お前!シルバゴンをいじめに来たのか!!』と激しく警戒して言っています。えつと…襟華さんが『そんなこととはしないわ。ただ困っているみたいだから』と優しく接していますか…ああ、だめです。やっぱりゴルザさん。襟華さんを疑っているみたいで今にも喧嘩をおっぱじめようとしています」

「どこにでもいるんだな…分かんず屋って」

「それでシルバゴンの方は何か言っていますか？」

リュウがそう言いミライが由良に訊くが

「ええつつと……シルバゴンさんは何か泣きながら何かを探しているんですけど……じゃないみたいです」

困った顔でそう言う由良にみんなはシルバゴンを見ると目が悪いせいかつまずいて転んだり、建物につまずいたりとまるでコメディを見ているみたいだったが誰からもわかるように泣いているのが分かった

「……泣いていますね？あの怪獣」

「いったい何を探しているんでしょう？」

「お財布……ですか？」

「人間じゃないんだぞ？」

「第一財布を入れる場所なんてないぞ？というより怪獣に通貨とかあるのか？」

「基本。無いぞ。餌なんて海なら魚や海藻。山なら動物や木の実。食べ物には豊富にある。物に値段付けて金で買う生き物は人間だけだからな」

「さすがゴジちゃん詳しいね」

「お前も怪獣だろ？」

「いや私、超獣ですから」

と、皆がそう言い合っているとトリヤマ補佐官が

「とにかく！説得はできんのか！あのゴモラというやつに！」

「『ゴルザです!!』」

トリヤマ補佐官の言葉にマル、テツペイ、和人がそう突っ込む。その瞬間ゴルザはいきなりエレキングに向かって突進し、エレキングを吹っ飛ばす

「なっ?!襟華!!」

「あいつ攻撃しやがった!」

和人と竜がそう言うのとゴルザはエレキングに向かって何か言う

「なんて言っているんですか？」

「ええ……と……『さっさと失せろや!この牛柄ナメクジ野郎!!』……」

だそうです」

由良が通訳すると皆は顔を引きつる。そして吹っ飛ばされたエレキングはゆっくりと立ち上がり体の汚れをポンポンと払うと和人にだけテレパシーでこういった

『……マスター。少しだけ荒っぽくさせてもらいます#』

「(…あ、まずい襟華のやつ怒ってらっしやる)」

襟華の言葉に和人は顔を青ざめる。そしてエレキングは長い尻尾をゴルザに素早く巻き付けると……

ビリビリビリビリ!!!

「*%、@#\$%?!」!!!

襟華はゴルザに向けて得意の電撃攻撃をする。そしてゴルザは言葉にできないほどの悲鳴を上げる。そしてエレキングが尻尾をゴルザから離すとゴルザは口から煙を吐き倒れる。どうやら気絶したようだ。現にまだ体が痙攣している。そしてエレキングはパンパンと手を払い

『さあーて、やかましい人……じゃなかった怪獣は静かになったし、事情徴収を続けますか』

「襟華（エレキング）、超こええー!!」

もし人の時の姿だったら顔は笑っても目が笑ってない表情だろう襟華のテレパシーを聞いた俺、夕子、由良そしてGUYSSメンバーは顔を青ざめてそう思う。ある意味ゴジラの次に怒らせちゃいけないな。これは……

そしてエレキングはゴルザを気絶させた後シルバゴンに事情聴取をするのだった……しかしシルバゴンは目が悪いせいなのかいくらエレキングが話しかけても全く別方向を見て何か話したりある時は何もないところにお辞儀をしたりと、挙句の果てにはエレキングにぶつかったりと全然、話が進まなかった

「本当にあの怪獣、目が悪いのね」

「なんだかギャグマンガで見た眼鏡外した時の人間を見ているみたいだな」

マリナとジョージがそう言いリュウが

「なあ、結城さん。これどうするの？全然事情聴取できねえじゃん」
「うくん……まさかここまでとはな。まあシルバゴンが町を破壊しないことが幸いだけど……」

流石の和人もこの状況に頭を悩ませる。襟華も頑張つて交渉しようとするが当のシルバゴンがエレキングを視認できず会話ができないんじゃないかといつてほおっておけばあの様子じゃ故意じゃなくても市街地に入つて何か壊してしまう可能性があった。どうすればいいかと頭を悩ましている

「なあ和人。少しいいか？」

そこへゴジラこと龍子が話しかけ

「お前のバトルナイザーで確か怪獣を擬人化させることができたはずだ。ならそのシルバゴンをやつをいつたんバトルナイザーに入れて擬人化させて出せばいいんじゃないか？」

「……あ」

盲点だった。和人はそう思った。確かにシルバゴンをバトルナイザーに入れ擬人化させて話を聞けば簡単な話であった

「そうだった……すっかり忘れてたな。すみません皆さん。ちよつと外に出てシルバゴンをバトルナイザーの中に入れてきます」

そう言うと和人は慌てて外に出るのであった。そして外に出た後和人は

「襟華ー！」

襟華の名を呼ぶと襟華が振り向き

『どうしたんですかマスター？』

「襟華。交渉ご苦労。これ以上は町に被害が出る。後はあの二体をバトルナイザーに取り込んで擬人化させた後事情を聴く」

『わかりました。すみません私の力不足で』

「いいや、襟華はよくやってくれた！襟華一度戻ってくれ」

『はい！my lord』

そう言うと襟華エレキングはシルバゴンに何か一言いうとシルバゴンは領くとエレキングは光に包まれバトルナイザーへと戻りそ

してバトルナイザーから出てきて襟華の姿に戻る。そして俺は、バトルナイザーをシルバゴンに向けるとシルバゴンはなんも抵抗もせず大人しくバトルナイザーへと吸い込まれる。そしてついでに和人は襟華の電撃で気絶しているゴルザもバトルナイザーに入れた。そして和人は襟華と一緒に指令室に戻るのであった

「いいですか。皆さん。シルバゴンとゴルザを出しますよ？」

和人の言葉に皆は頷く。そして俺はネオバトルナイザーをかざし「出てこい。シルバゴン。ゴルザ」

そう言うとネオバトルナイザーが光だし、そこから二つの光が出てくる。そして光が収まると一つは地面に横たわる女盗賊のような少女。そしてもう一人は羊のような角をし白いワンピースを着た少女が現れる。そうゴルザとシルバゴンが人間隊となって出た姿だ

「すごい・・・本当に擬人化させるなんて・・・」

テツペイは驚いた顔をする。そしてシルバゴンの事情聴取が引き続き始まるのであった。

第11話

ルルルルル

少しゆったりとした音楽が流れるガイズの指令室。その中でガイズ隊員とその前に和人とサコミズ隊長が席に座り、その前には。白い服を着た女の子とその隣に芽を回しながら気絶している女の子がいた。

「ガイズの部屋。今日のゲストはシルバゴンさんとゴルザさんです」

「は：はい。どうもよろしくお願ひします」

「はい初めまして。あ、私は怪獣使いの結城和人そしてこちらが：：」

「クールガイズジャパンのサコミズだ。よろしくシルバゴンさん」

「は：：はい。よ、よろしくお願ひします：：：」

二人の挨拶にシルバゴンは少し緊張気味に言う中：：：。

「：：おい。なんだよこの徹○の部屋みたいな雰囲気は？これ事情聴取だよな？」

「でも結城君は普通の事情聴取だと相手が怖がるから場を和ませるためだって」

「確かに場は和むけど。もうこれって別の何かだよ」

「隊長はノリノリだけど：：：」

リュウ、コノミ、ジョージ マリナがそう言う。そして

「なんで私たちがこんな茶番を：：：」

「まあまあ、龍子ちゃん。いいじゃない」

「そうだよゴジちゃん。楽しいじゃん」

「誰がゴジちゃんだ。星子」

軽くため息をつくゴジラこと龍子に襟華と星子がなだめる

「あと、言っておくが星子。私はお前よりは年上なんだぞ？」

「え？ゴジちゃんて幾つだったけ？」

「あ？2億年以上は数えてないよ」

「：え？：」

その言葉にシルバゴンの事情聴取している和人とサコミズ隊長以外の人が驚く

「え？ゴジちゃん。億年才なの？」

「うーん・・・恐竜つてやつが現れた時に俺たちの一族は海底のトンネルで人間どもにたたき起こされるまで冬眠してたからな・・・そつから計算してだ・・・ちっ！いやな過去、思い出しちまったよ」

顔を歪め、怖い顔をする龍子。人間に起こされた・・・それは人間が悪魔の兵器を使い自分から家族を奪い、体を作り替えられた忘れようもない怒りと憎しみだけが残る思い出だった。

「あ・・・ごめん龍子さん。何かいやなこと、思い出させてしまいましたか？」

「いや・・・いい。お前らのせいじゃないからな。人間は和人と一部除いてはまだ嫌いだが、この世界の連中がやったわけじゃねえし・・・」

油良が心配そうに言う。龍子は肩をすくめそう言う。彼女は和人や一部の人間には少しだけ心を開いてきてはいるがそれでもまだ人間のことは許せず嫌いだった。

すると星子が

「でも億年才か・・・ウルトラマンより長生きだね？・・・とすると・・・はっ！ゴジちゃんはBB・・・」

「お前は一言余計だバキシム!!それに私は冬眠してたから年は取っていない！」

「でも二億年なんですよ？」

「時間は経ってるが、私は人間の年齢ならまだ19歳だ!!」

「痛っ!!」

バキシムこと、星子が余計なことを言いゴジラに殴られる。それを見たガイズのメンバーは

「億年オツて・・・すごいな。あのゴジラっていう怪獣？なあ、ミライ？ウルトラマンで最年長つて誰なんだ？億年ぐらい生きている人はいるのか？」

「それはウルトラマンキングだと思います。でも僕もキングがいくつなのかは知りませんが・・・」

「でもゴジラ・・・いいえ龍子さん。さつきものすごく怖い顔をしてましたけど昔、何かあったんでしょうか？」

龍子の過去をよく知らないジョージ、ミライ、コノミが話している中、トリヤマ補佐官は

「怪獣つというのは長生きなのかな？それにしてもあの女性。先ほどゴメラと名乗ってたが？ほんとにあの時の黒い怪獣なのかね？」

「ゴジラですよ。補佐官」

「トリヤマさん。龍子さんは正真正銘のあの黒い怪獣ゴジラですよ？後名前はなるべく間違えないうでください失礼ですから」

「ああ、すまないエレキテル君」

「エレキングです。それと今は襟華という名前ですので、お間違えの無いように。私もあまり怒りたくはないので？」（笑ってるけど目は笑ってない）

「は…：はい。すみません」（顔青ざめ）

そう皆がいろいろと話している中、サコミズと和人は

「なるほど…：それは確かに困ったことだね。よし分かった。きつみの探し物を探すのを手伝おう」

「ほ、ほんとですか!?あ、ありがとうございます!!隊長さん！」

「あのシルバゴンさん。それ花瓶ですよ？サコミズ隊長はこつちです。それと僕も手伝いますから」

「和人さん…：本当にありがとうございます！怪獣である私なんかのために!!」

「困ったときはお互い様だよ。後、君が今頭を下げてる相手は戸棚だよ？」

と、順調に話を進めていた。しかしシルバゴンは目が悪いせいか花瓶やラ戸棚を和人やサコミズと勘違いをしては頭を下げ礼を言っていた

「事情聴取とやらは終わったのか和人？」

龍子が和人にそう訊くと、和人は

「ああ。やっぱり、落とし物だったみたい」

「しかも、かなり大きな落とし物だ…：」

「どんな落とし物なんですか？」

和人とサコミズの言葉にミライが訊くと二人は説明した

「コンタクトレンズを落としました?」

「は…はい。そうなんです。あれがないと何も見えなくて…」

皆の言葉にシルバゴンは恥ずかしそうに言う。話を要約すると、視力の悪いシルバゴンは最近、コンタクトレンズを付け始めたのだが、ある日それを無くしてしまい、探していたところ、友達であるゴルザと一緒に探してくれることになって、現在探していたとのことだった。

「怪獣にコンタクトレンズってあるのか?」

リュウがもつともな質問に皆が頷くとバキシム事、星子が

「一応あることにはありますよ。水晶を加工したりとか、他の宇宙人が販売してるのをもらったりとか。それに怪獣同士の付き合いとかこの頃多いよ」

「あ、それ私怪獣墓場で知ってます。確かモンスターネットワークですよね?」

「そうそう。コンパなんかしよっちゅうやってたね」

「(人間と変わらないな…)(…)(…)」

「(俺がクソ神どもに幽閉されてる間にそんなことが?)」

怪獣の暮らしとは野生じみていたと思っていたリュウは少しショックを受けていた。

すると…

「う…う…う…」

エレキングこと襟華の電撃で気を失っていたゴルザが起きだした

「あ、ゴルちゃん起きた」

「んあ?ここは…あれ?シ、シルバ?なんだその格好?まるで

人間みたいだぞ?・・・て、あれ!?なんだこの姿!?!」

目が覚めたゴルザは自分の格好とそして友人のシルバゴンの姿が変わっていることに驚くと・・・

「えっと・・・こんにちわでいいかな?君はゴルザさんでいいんだよね?」

と和人が話しかけると、ゴルザは一瞬、呆けた顔をしたと思ったらすぐに眼を鋭く光らせ

「おらあ!!」

「ふべっ!!」

急に回し蹴りで和人を吹っ飛ばす

「マスター!?!」

「和人さん!?!」

目を回し倒れている和人に襟華と油良が慌てて駆け寄ると

「てめえら人間だな!また俺たち・・・いやシルバをいじめに来たのか!!」

そう言いずんずんと和人に近寄ると

「やめろ!和人様はそんな奴じゃない!それよかいきなり蹴飛ばしたの謝れ!!」

星子がゴルザの前に立ち鋭い目でゴルザをにらむと

「なんだ!?!お前もこいつの仲間か?いいぜ!相手になってやるよ!!」
「超獣をなめるな!!」

そう言ったかと思うとすぐに取っ組み合いになる。互いの頬をつねったり殴ったりと、もはや乱闘状態だ

「うわっ!?!ここで暴れるなよ!?!」

「おいやめろって!?!」

「喧嘩はダメですよ!?!」

リュウとジョージ、ミライがそう言いトリヤマが

「ええい!二人ともやめたまえ!!」

そう言いトリヤマはそばにあったベルをちゅんちゅんと鳴らすと「ゴングが鳴ったぞ。スタンディング・エイト・カウント!!」

とそう言った瞬間、二人の腕がトリヤマの襟をつかんだ

「え？うわっ!？」

「補佐官!？」

二人に引つ張られたトリヤマは二人の乱闘に巻き込まれる。それを見かねたのか

「おい・・・二人ともそこまで・・・」

と、龍子が止めに入ろうとした瞬間

「うるさい!!引っ込んでろ!!」

と、二人の拳が龍子の顔面にクリーンヒットした

「「あ・・・」」

それを見たみんなは絶句し、そして龍子にパンチをしたゴルザと星子は

「「あ、」」

と、まずいと感じたのか顔を青くする。そしてパンチを食らった龍子はというと・・・

「ほお・・・.#」

軽く鼻血を出し、そして怖いくらいのスマイルを見せていた。そして静かに両腕の裾を巻き上げる

「「あわわわ・・・」」

状況を理解したのか、龍子の怒気と殺気に星子とゴルザは顔を青くする。

そしてガイズ基地内にすごい衝撃音が二つと二人の悲鳴が上がるのであった